

神と呼ばれた少年は平穏な日常を夢見るか

さとう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夜一さんがその辺から拾つてきた男児が、10歳の誕生日を機に出生などの秘密を知り、周りの大人たちとなんやかんやするお話です。初投稿です。

至らぬ点がありましたらお教えいただけると幸いです。
タグなども全然わからないので、徐々に追加・修正していきます。
主人公

目 次

ドキッネタバレだらけのあらすじ・キャラ紹介そして挿絵集

1

第一章 10歳の誕生日の物語

プロローグ：少年はしばしば夢を見る／第一話：少年は起床する

5

第二話：実家が駄菓子屋。あとはわかるな？

第三話：厨二病ではないですが

第四話：お父様、次は法廷で会おう

第五話：さようなら

第六話：話す覚悟、聞く覚悟

第七話：むかーしむかしあるところに

第八話：秘技『二人喋り』

第九話：ハッピーバースデートゥーユー！

第十話：違う世界と罪の話

第十一話：実は私、

第十二話：ご飯に勝るものはなし

第十三話：親の心を知る※実の子ではありません

第二章 物語の裏で彼は何を思う

第十四話：脳内リサさんの言うことは大抵嘘

第十五話：おいしいご飯には勝てなかつたよ……

第十六話：ぬいぐるみ趣味？

第十七話：犬も怖けりや母も怖い

第十八話：「ぐつと尻に力入れて」と悩んだ by 狂犬

53 50 48 45 42 39 36 32 29 26 23 21 19 16 13 10 8

第十九話：私が私を見つめました

第二十話：家族が増えるね？

第二十一話：暴風域突入

第二十二話：駄々が有効だと覚えたらどうするの！

第二十三話：筋肉痛不可避

第二十四話：妹との遊びはほほ育児

第二十五話：バトルはバトルでもレスバトル

第二十六話：おーい！

第二十七話：せーの、ハンサム工口店主ー！

第二十八話：さようなら、狂犬（語弊）

第二十九話：年上っぽい女に年齢は聞くな

第三十話：鬼に金棒：強い者が強い物を持つ例え

第三十一話：見た目は輝夜、頭脳は他人。その名は

第三十二話：ようい、どん

第三十三話：やつたね輝夜、兄弟が増えるよ

第三十四話：まあ主人公ですからね

第三十五話：出発

第三十六話：小学生は見た！

第三十七話：一人と一匹で得られるものもあるつてこと

三十八話：悩むは本人ばかりなり

第三十九話：狂犬は苦労人

第四十話：初めましてキヤンセラー黒崎

第四十一話：知上村、再来！

最終話：おはなしにもならない

番外編：参観日→地獄

番外編：静かに買い物もできない 1

番外編：静かに買い物もできない 2

番外編：静かに買い物もできない 3

番外編：かぐちゃん、そうちちゃん

ドキツネタバレだらけのあらすじ・キャラ紹介そして挿絵集

・浦原輝夜
うらはらかぐや

小学生の普通の男の子。かわいい。そして弱い。

他の子より背が低く目が赤いことがコンプレックス。どのパート見ても両親と似てないから血は繋がつてない気がしている。

性格はツン多めだが素直な子。ツツコミばかりしているのは周りにボケが多すぎるから。

黒崎家の双子の姉妹と仲良し。

実は昔隣村で血神ちがみと呼ばれ崇められていた。当時の名は31代目血神『白蛇』。色々あつて実の父親に殺されかけるが、吸血鬼の血由來の回復力で復活。なんとか赤ん坊の姿になつたところを四楓院夜しほういんよい一に拾われた。

先祖返りで先代より全然強い。しかし、筋肉などのフィジカルがかなり弱いのですごいことはそんなにできない。できるのは回復と魅了。

・狂犬
きょうけん

現在は刀と同化しているが、高貴な純血の吸血鬼。目を合わせることによつて相手を魅了し操る能力に長けていた。もちろん今は目という概念がないので力は発揮できない。

初代血神。吸血鬼にしては珍しく、人間と結婚した。その後、子孫には自分が吸血鬼だと明かしていない。

昔学校で教えられていたため、中堅より上の世代の死神には吸血鬼の中でも最強かつ最凶と恐れられているが、別にわざわざ危害を加えるつもりはない善良な吸血鬼。

身体がないのは身体だけ技術開発局ぎじゅつかいはつきょくに持つていかれたから。

実は狂犬と同化している刀は斬魄刀。狂犬は死神に殺されてから輝夜が産まれるまでの意識がなかつたため実際は200年程度しか

生きていな。

・月夜鳥
つきよがらす

輝夜の斬魄刀。適当で快樂主義的な性格だが、持ち主の言うことは聞く。

能力は主人の血液を媒体とした爆発。使い方は空に浮かぶ雲を爆風で晴らしたり、手足の先で爆発させて高速移動したり。攻撃にも一応使えるが、炎が出るわけでもないので単体ではそんなに強くない。イメージは、誰しも昔理科の実験でやつたであろう発生させた水素の爆発。めちゃめちゃに使わなければ貧血になることはない。

解号は『あかるき夜に目を覚ませ』。

・浦原喜助
うらはらきすけ

しがない駄菓子屋とは世を忍ぶ仮の姿、元十二番大隊長にして技術開発局局長である。胡散臭い帽子と下駄を愛用している。

輝夜のことは実の子のように可愛がつており、よくウザがられる。輝夜が中学生になつて『お父さんの服と一緒に洗濯しないで!』って言われたときに耐えられるようにイメージトレーニングが日課。

血神のことは知らなかつたが、吸血鬼『狂犬』についてはおおまかに知つていた。

・四楓院夜一
しほういんよいいち

食べて遊んで寝る猫とは世を忍ぶ仮の姿。元二番隊隊長にして隠密機動の長、さらには四大貴族の娘さんだつた。鬼ごっこが好きでめちゃくちゃ素早い。そしてよく食べる。

輝夜のことは可愛がつているが、ダイナミックかつアグレッシブなのであまり伝わっていない。

『狂犬』のことは知つていたが、輝夜を拾うときは気づかなかつた。

・あの人

作中で『あの人』と呼ばれたら大体輝夜の実のお父さんのこと。輝

夜はお父様と呼んでいた。

背は高く目はキリツとしていて真面目。血神についてはあまり信じていなかつた。

輝夜の目を見るとぐわーつてなることに気づいて監禁し殺害しようとしました。

下の名前は千樹郎。せんじゅろう 上の名前は浮竹。うきたけ

・30代目血神『野兎』
のうさぎ

輝夜の実のお母さん。輝夜はお母様と呼んでいた。

髪はふわふわ、身長は低め。たれ目でおつとりとした印象。しかし昔はやんちゃもやんちゃ、その名の通り野を駆け回る兎のようだつた。今は病弱でお外出たい欲がすごい。

息子に見つめられてもなんともない。息子は死んでしまつたと聞かされて心を痛めている。

・32代目血神『川瀬』
かわうそ

輝夜の実の妹。明るく元気を体現した性格で、動きにいく着物をものとせず暴れまくる。洗濯係のお父様泣かせの台風娘。目は赤くない。

輝夜のことは知られていなかつた。のちに春陽はるひと名乗る。

挿絵

浦原輝夜

浦原輝夜

浦原輝夜と紬屋雨

血神『狂犬』

輝夜・雨・ジン太の相關図

第十四話後

血神『白蛇』

血神『川瀬』

隨時更新予定です。

第一章 10歳の誕生日の物語

プロローグ：少年はしばしば夢を見る／第一話：少年は起床する

物心ついた頃から、あるいはそれよりも昔から、同じ夢を何度も見る。厳密には同じ夢ではない、同じ少女が主人公の夢だ。

少女は大抵同じ部屋にいた。家具はそこそこあるが、少女以外誰もいない部屋。刀らしきものも部屋にはあった。

少女はいつも豪奢な着物を着ていた。重そうな服に苦しそうな帯だが、少女は特に気にすることもなく生活している。

幼い頭にはよくわからないが、現代というよりは江戸時代だか大正時代だか、そんな雰囲気の世界だった。

少女はいつも、本を読んだり舞を舞つたり、刀に話しかけたりしていた。僕のように、ゲームをする様子はなかつた。それでも、少女はそこそこ楽しそうだつた。

しかし、たまに見る夢では少女は辛い顔をしていた。大丈夫？と声をかけてやりたいが、いつも僕は声を出せない。夢の中には僕はいないのだ。

少女の気持ちが流れ込んでくる。どうやら、父親がどんどんおかしくなつているのを自分のせいだと思つてているらしい。それはそんな表情をしているわけだ。

僕のお父さんはいつもふざけてはお母さんや他の家族に怒られているが、普通のお父さんだ。おかしいと言つたらちよつとオタク気質だというだけだが、それも嫌であるわけではない。

もしもあるお父さんが突然、この少女の父親のように狂氣と殺意に満ちた目で接してきたり、なんて、想像すらできないが、それがあまりに辛く悲しいことだけはわかる。この子の痛みが自分のことのようわかるぶん、なんとかしてやりたいと思うのは当然だろう。

歯痒い気持ちで彼女を見る。

少女の口は、『たすけて』と動いた気がした。

目が覚めた。

カーテンから光が漏れ出ている。この感じは朝だろう。寝ぼけている頭を起こすように伸びをした。

「輝夜殿オー！ 朝ですぞ！」

「はあい！」

下の階から、よく響く低音が聞こえる。テツサイさんだ。

テツサイさんはお母さんでもお父さんでもないが、あの二人よりもお母さんらしくお父さんらしい。僕がまだ服を満足に着られない頃、服を着せる役割はテツサイさんだつた。ご飯も作ってくれるし、僕と遊んでくれるし、叱られたことも片手では足りない。背が高くて怖い顔をしているが普段は温厚なテツサイさんは、しかし、怒るとビジュアルに違わぬ迫力がある。ジン太のせいで何度も怒られたことか。

このまま二度寝をしたいが、そんなことをしたらまた『学校に遅れますぞ』とビリビリする声で怒られるだろう。ここはどつと起きるのが吉だ。

「おはよう、テツサイさん」

「おはようござります」

今日の朝ごはんは、白飯に焼き鮭、味噌汁だ。絵に描いたような理想的な日本人の朝ごはん。朝起きるのは辛いけど、テツサイさんの作る朝ごはんのためならどうつてことないくらいに美味しい。

「お父さんは？」

「浦原殿は夜一殿と共に出かけられました」

「そなんだ、珍しいね」

僕のお父さん、浦原喜助は朝に弱い。僕が小学校に行く時間になつても起きてこないこともざらにある。お母さん、四楓院夜一は自由人で、猫に変身してはそのあたりを散策して帰つてくる。

変人二人でどこに行つたのやら。どうせ聞いても適當にはぐらかされるだけだから詳しく述べことはない。しかし、もし二人がいつもの服で行つたなら、職務質問されたり不審者として通報されたりされ

ないか心配だ。

ジン太と雨はもう起きて掃除などをしているようだ。いつものよう
に二人が言い争っている音が聞こえる。たまにほうきの音もする
から、テツサイさんがすぐに助けに行くだろう。

朝ごはんを平らげたら、顔を洗って歯を磨いて、服を着替えて家を
出る。小学四年生の僕、浦原輝夜の日常だ。

「行ってきます」

「いつてらっしゃいませ、輝夜殿」

「おー！」

「いつてらっしゃい……！」

第二話：実家が駄菓子屋。あとはわかるな？

「ただいま」

「おかえりなさい、輝夜さん」

家に帰ると、雨に出迎えられた。学校での話は、特別面白いこともなかつたので割愛、だ。

「おはよう、輝夜」

「お父さん！ もう夕方なんだけど」

「だつて輝夜におはようつて言われてないんスもん！」

「……はいはい、おはよう」

「おはよう～！」

「もう！ ひげ痛いし苦しい！」

ぎゅうっと抱きしめられる。ランドセルも構わずまとめて抱きしめるものだから、ぐえ、と喉から潰れた声が出た。おまけに微妙に伸びた無精ひげのある頬で頬ずりされて、痛いたらない。

なんとか腕から逃げ、息を吐く。別に嫌いというわけではないが、愛情表現が過激すぎる。こう度々ぎゅうっとされたらいつか死んでしまうのではないか。それでも、かわいい息子が苦しそうにしているのだから、加減というものを覚えてほしい。

家に入ると、居間の角になにやら包装された箱のようなものが見えた。隠しているつもりだろうが、最近背が高くなつた僕から見ればバレバレだ。の人たちは、未だに僕が120センチもないと思つているのか。もう僕の身長は126センチ以上もあるというのに。

お父さんは180を超えているようだから、似たようなことなのかかもしれない。……それはそれでむかつくな。

このちらつと見える綺麗な箱は、僕への誕生日プレゼントだろう。何を隠そう、僕の10歳の誕生日は明後日に迫つているのだ。なるほど、今日朝から出かけていたのはこれか。

そうなると、これに気づかないふりをしていたほうがいいな。演技派輝夜の見せどころだ。見えてないように素通りして、自分の部屋にランドセルを置く。

今日のおやつは何を食べようかな。

浦原商店では、おやつは1日二つまで、売られている駄菓子から選べることになっている。昨日はスナック系食べたから、チョコにしよう。

「おー、輝夜やんけ。背伸びたか？」

「真子さん！ まあね、この前測つたら128・3センチだつて」「こないだは130センチ言うとらんかつたか？ 縮んどるやないの」

「縮んでない！ 去年は122センチだつてちゃんと言つたでしょ」

せやつたやせつたと言ひながら頭をガシガシ撫でてくる、この人は、平子真子さん。お父さんの友達らしく、たまに遊びに来ては僕にちよつかいを出してくる。

僕が怒つても『すまんすまん』と笑うから、真子さんは僕にとつて、眞面目に接してはいけない人の一人だ。よく撫でられるけどいつも痛いし。

真子さんは、駄菓子屋を物色してから奥に入つていった。お父さんに何か用事だろう。僕に聞かれると困る話をすることが多いから、僕はとつととお菓子を選んで自分の部屋に戻るとしよう。

第三話：厨二病ではないですが

僕の両親は変人だが、常識人として振る舞っている僕も外から見れば変な人なのだろう。

あれは7年前。僕がまだ3歳だった頃だ。

そのときから目つきはきつかつたが、別に森羅万象にガンをくれていたわけではない。……はずだ。それなのに、何故か同級生からよく喧嘩を売っていた。突き飛ばされたり、叩かれたり、そんなふうに暴力を振られがちだつた。

身長がとりわけ低いでもなし。他の身体的特徴といえば、この赤い目くらいだが、目が赤いくらいなんだ。明るい茶色の子もいるし、たまに青い目をした子だつている。

暴力自体は痛いしできればやめてほしかつたが、それよりかは原因を教えてほしかつた。

向こうの言い分は大抵、『なんかよくわかんないけど頭がカツとなつて』ばかりだ。よくわからぬで済んだら警察はいらぬいんだぞと言いたいところだが、とにかく僕が何かをしたせいで殴られたわけではないようだつた。

「幼稚園で叩かれたんだつて？」

「どうして言わなかつたんじや」

傷の治りは早いほうだから、しばらくは両親にも気づかれないかつたのだが、先生が見かねて連絡をしたようだつた。

痛いのは嫌だけどわざわざ言うほどでもない、が本音だつた。別に忙しい2人を捕まえて『なぜかいつも殴られるんだよね』など言えるものか。解決策もないというのに。

しかしそれを言うと怒られそうだ。既に怒つている様子だが。

どう言い訳しようか、でも僕は被害者では？ そう考えていると、テツサイさんが助け舟を出してくれた。

「何故暴力を振われているか、わかりますかな？」

わからないんだよ、身体が勝手に動いちやうんだつて。と言つたつもりだつた。しかし、僕の口から発せられ僕の耳に届いたのは、全く

違う言葉だった。

「赤い目のせいだよ。この目は人間を惹きつけちゃうんだって」
いやいやちょっと待て。さつき目の色は関係ないという結論に至つたはずだろう。しかも人間を惹きつける？ 3歳にして厨二病を拗らせているつもりはない。

聞き間違いだと思ったかつたが、目の前の大3人がみんな『赤い目……？』と微妙な顔をしていたので残念ながら合っているらしい。
「誰かに言われたの？」

お父さんが優しく聞いてくるけど、全然心当たりはない。思い出せる限り遡つてみるも、子供がそんなことを言うわけがないし、先生だつてそうだ。そうなるとあとはこの3人しか関わりを持つていなあから……。

いや、誰かが言つていたはずだ。

『私たちが持つ赤い目は、人間を惹きつける。だから気をつけなくてはならないの』

これは、誰が言つたんだ？ 女の人の声で再生されたような気がする。でも、誰が。

ありそなのは、夢くらい。このときはまだ本も読んでいなかつたし、ゲームもしていなかつた。

「……うん。言われたことある、かも。でも誰かはわかんない。夢かもしぬれないし」

「そうか。じゃあ明日からは眼鏡をかけてみたらどうじや？ 気休めかもしぬれんが」

「ああ、試してみる価値はありますね。これから買いに行きましょうか！」

結局、眼鏡をかけるとほとんど殴られなくなつたため、それから一昨年までずっと眼鏡をかけて生活していた。眼鏡が守つてくれたのか、全く別の要因で暴力が止んだのか。僕にはわからないが、小学校中学年になると同級生も安易に暴力を振るわなくなつたので、眼鏡はお役御免になつたのだつた。

このように、言われた覚えのない言葉が頭に流れてくることが昔か

ら多かつた。例えば、『私も外に出たいわ』『そろそろ血を飲める時期ね』などだ。血を飲める時期つてなんなんだよ……。

それに加えて何度も同じ少女が出てくる夢を見るものだから、自分でも変な子だと思わざるを得ない。

そして2年後、5歳になつた僕は『夢の少女はこの世界のどこかにいるかもしれない。きっと助けてほしいから夢に出るに違いない。絶対に見つけて助けてあげるんだ!』と言い出した。

思い出すだけで恥ずかしい。どこにいるかもわからないのに少女を探そうと家を飛び出すのを、両親に必死で止められたのだった。

実は今でも探しているが、これは2人にバレたら腹を抱えて笑われる所以絶対に内緒である。

第四話：お父様、次は法廷で会おう

その夜、僕はまた夢を見た。

いつもの少女は、今日は珍しく悲しいような顔をしていた。大きくて強気な赤い目が濶んでいるし、自慢だらう腰まである黒髪も心なしカツヤがない。同じくらいだつた背丈も猫背気味になつていて、今は僕の方が高く見える。

「お腹空いた……。今日もご飯ないのかな」

彼女はお腹をさすりながら、たしかにそう言つた。今日も、ということは何日も食べていいのだろうか。いつもは彼女のお父さんがご飯を運んできてくれるのに、出張とかでいいのか？

かく言う僕も、かなりお腹が空いていた。もっと辛いはずの彼女がいるのに、早く夢から覚めてテッサイさんの朝ごはんを食べたいなど思つてしまつた。

空腹だけじゃなくて、胸がざわつく氣もする。熱が出たときと似ているから、朝起きたら熱を測らなければ。変な汗も出てきた。あまり風邪をひかないけど今回は重症なのかもしれない。

「どう思う、狂犬。……やっぱり、そうなのかな。僕の聞き間違いじゃなかつたのかな」

少女が刀に語りかける。どうやら、この部屋に大事に置かれている刀は狂犬という名前らしい。以前はぬいぐるみに話しかけている感じなのかと思つていたが、僕に聞こえないだけで会話は成り立つているようだ。

「うん、そうだよね。そんなことあり得ないもん、だつてお父様だよ」自分自身に言い聞かすみたいにそう言つて、いつもみたいな優しい雰囲気に戻つた。

「白蛇、こちらへ来なさい」

「……はい」

少女が刀と会話してしばらく経つと、少女のお父さんが部屋に入ってきた。呼ばれた少女は、刀を持つて立ち上がる。

白蛇とは少女の名前らしい。何度か呼ばれたのを聞いたことがあ

る。

たまに見る少女のお父さんは、目がキリリとしていて利発そうだ。しかし今日は、いつもに増してギラギラとした表情を浮かべ、あまり見たことがない僕でも正気ではないと一目でわかるほどだった。

行つちやダメだ、とは言えなかつた。夢では声が出ない。しかし、わかつてはいるが今だけは止めなければならないと本能で理解した。せめて、少女——白蛇に着いていこうと、見失わないように背中を追つた。

白蛇のお父さんが足を止めたのは、初めて見るところだつた。建物の外、裏山の少し開けた場所。

部屋から出てはじめて、今までいたのが神社の本殿のような建物だつたと知る。お父さんの服装も神主さんぽいから、ここは白蛇一家の神社だろう。

それなら、白蛇も巫女さんの服を着て外に出た方が良かつたのではないか。よく見ればそれらしい女の人が数人、境内を掃除しているようだし、一人で部屋に籠るのは気が滅入るのに。

「おお、やつと来た。遅いつすよ」

「すまない。……これで本当にいいのか、考えていた」

さつきは木々に隠れて見えなかつたが、他にも人がいたらしい。身体の大きな男が四人だ。

四人とも、それぞれ刃物を持っていた。もしかして、それで僕を……？　いや、早とちりはよそう。どちらにしろここで逃げるという選択肢はない。白蛇がここにいるのだ。

「お父様……？　こちらは、」

「白蛇……本当にすまない。しかし私もどうにかなりそなんだよ。……いや、もうなつてているのかもしけない」

頭がガンガンする。やはり今すぐにでも逃げたほうがいいと身体が告げている。この際、白蛇の手を取つて神社に降り、巫女さんたちに助けを求めるしかない。

夢だとわかつてはいるはずの僕がこんなに焦つているのに、白蛇は全くと言つていいほど動じていなかつた。ただ悲しく目を伏せて、

『やつぱり、そうなんですね』と呟く。

「知っていたのか、そうか……。私だつて、こんなことしたくはなかつたんだ。でも仕方ないんだよ、村のためだ。わかつてくれるね」

やめてくれ。なんの話をしているんだ。帰ろう、浦原商店は白蛇みたいな子も歓迎してくれる。僕はまだ君を、現実で見つけられていいんだよ。だから――

「血神『白蛇』、君にはここで死んでもらおう」

第五話：さようなら

「……どうして、ですか」

「君は人を惑わす力を持つている。君が神社から出て村民と出くわすと危ないだろう。もちろん村民が、だ。わけもわからず狂わされるのは、しんどい」

白蛇は、僕と同じなんだ。赤い目は、人を惹きつける。呪いにも似た力は僕たちには強すぎる。

「神社にいたら、大丈夫です」

「僕が大丈夫じゃない。野兎はなんともないらしいが、僕に君の存在は毒だ」

「そう、ですか……」

自分の存在が毒だなんて、実の父親から言われたらショックに違いない。きっと白蛇はうつすらわかつていたのだろうが、何もそこまで言わなくとも……いや、殺すしかないところまで来てしまったのだから、配慮なんてもの求めるのは無理か。

ちなみに『野兎』とは、白蛇のお母さんだ。今まで一、二回しか見たことがないけど、穏やかで優しそうだった。

今日のことはお母さんには伝えたのだろうか。こんなこと、言えなんか。白蛇のお母さんは、お父さんと違つて正気のままなんだから。「すまない。さようなら」

白蛇のお父さんは、眉間にしわを寄せたまま言つた。

男たちの中の一人が白蛇の胸をひと突きしたのを皮切りに、残りの三人が飛びかかる。白蛇は諦めたように目を閉じたきり、自発的には動かなくなつた。

目の前で人殺しが行われているという非日常に、目を瞑るのを忘れてじっと見た。見るだけで白蛇が斬られたところが痛むようだつたが、信じられないことに斬られたそばから回復して、次の攻撃が来る前に五体満足元通りになつている。

彼女に何が起こっているんだ？ 普通、腕を切り落とされたら二度と復活しないだろう。腕どころか小指すら切り落とされた経験がな

いのでわからないが、しかしそのくらい経験がなくとも常識なはずだ。

——彼女は、本当に人間なのか？

そのとき、頭を殴られたような衝撃が走った。

僕は何かを忘れている。重大なことだ。昔、何かがあつた、何かがあつたはずだ。

目の前では、脅威の回復能力をしても回復しきれなかつた傷を抱える白蛇が這いつくばつていてる。

男たちは、何がそこまで駆り立てるのか、狂気に満ちた目で刃物を振り下ろしていた。ちょうど、僕をここまで連れて来たお父様と同じように。

こうしている内にも白蛇は弱っていく。既に右腕を再生できなくなり、男の一人が右腕だつたものを熱心に輪切りにし始めた。次は左脚、右脚。

やめてくれ。僕はゲームが好きだがホラーゲームなんてしたことない。テレビでホラー映画が始まつても、いつもお父さんが消してくれる。

まして、こんなリアルな情景。目を瞑りたくても身体が言うことを聞いてくれない。白蛇とリンクしているみたいに、腕や脚の感覚がなくなる。全身が痛い。昔かかつたインフルエンザなんて目じやないくらい。

涙が出る。僕は滅多なことじや泣かないのに。歯がガチガチと鳴る。寒いんじやない、恐怖と混乱で。

この夢はいつ終わるんだ。誰か起こしてよ、お願ひ、無精ひげの頬ずりも我慢する、朝ごはんなんてなくていい、だから。

違う、誰かになんとかしてもらうんじやない。これはきっと、僕が思い出せない何かを思い出さなくちゃ終わらないんだ。

だから思い出せ、早く。身体の感覚が全部なくならない内に。

いつのことだ？ 物心つく前、いや、それよりもっと前。

僕が、浦原輝夜が生まれる前のことを。

僕が、血神『白蛇』だつた頃のことを。

足元では、白蛇ぱくだった肉片と宝刀『狂犬』が散らばっていた。

第六話：話す覚悟、聞く覚悟

僕は飛び起きた。寝汗はびっしりなのに暑いどころか凍えそうだ。

夢の中での出来事は全て覚えている。

何が『あの子は僕が助ける』だ、そもそもあの子は昔の僕なんだから無理に決まつてゐるのに。

まだ動悸がおさまらない。胃から何かがせり上がつてくるし、過呼吸でくらくらしてきた。寝起きは間違いなく人生で一番悪い。

そうだ、狂犬は？　たしかお父さんの部屋に刀があつたのを見たことがある。浦原輝夜になつてからずつと会話してないのに、それ以前を思い出してからは狂犬と話したくてしかたない。あのころは狂犬だけが唯一の抛りどころだつたのだ。

今は深夜でお父さんを起こすのは忍びないが、狂犬と喋るだけで呼吸が落ち着きそうなんだ。それに、お父さんはまだ起きてるかも知れないし。

こうしてても苦しいだけだ、とにかく部屋に行つてみよう。

そうして、ベッドから足を下ろしたときだつた。バンツと扉が乱暴に開かれる音が響く。

「輝夜！　大丈夫つスか!?」

「お、お父さん？」

部屋に駆け込んできたのは、お父さんだつた。お母さんも続いて入つてくる。二人とも血相を抱えてどうしたんだ。何かあつたのか？

「何かされたりしとらんか!?　外傷はないようじやが……」「えつと、いや、何もないんだけど……強いて言うなら、夢を見たくらいで」

よかつた、と二人が胸を撫で下ろす。

下で何か起きたとすれば物音もするはずだが、聞き逃した？　わからぬことは多いが、それを聞いてもいいものか。

待つっていてもこれ以上言うつもりはないようだし、聞かないでおこ

う。はぐらかされたのも聞いたことを後悔するのも苦手だ。

起きてすぐから比べると頭がスッキリしてきた。僕も夢の件で動揺していたが、この人たちの動揺ぶりを見て落ち着いてしまったようだ。

余裕が出てくると、今度は疑問が湧いてくる。お父さんとお母さんは、実の子供でもない僕をどうして育ててくれたんだろう。どこで出会ったのかすらわからない。そもそも、あそこまで細切れにされて、生きていたのか？ 生きていたとして、なんで幼くなつちやつたんだ。浦原輝夜としての記憶で一番古いのは3歳くらいのものだから、身体が若返っているか、死んで生まれ変わったか、のどちらかなのか。悩む前に、この二人には過去のことを言つた方がいいだろう。何か知つているかもしれないし、なにより、僕のことを知つていてもらいたいと思つた。

「……ねえ、話したいことがあるんだけど

「夢の話、ですか」

「うん、そんな感じ。……いい？」

「悪いわけがなかろう。輝夜の話じゃつたらなんでも聞く」

きつとこんなふうに言つたらどんな重大な話をされるのかと構えてしまうのに、お母さんはなんでもないみたいに即答してくれるんだな。なんだかそんな些細なことが嬉しくて、僕は意味もなくベッドに座り直した。

第七話：むかーしむかしあるところに

僕は昔、ちがみきょう血神教と呼ばれる、小さな村の小さな宗教の神様だった。初代は狂犬。なぜか今は刀に姿を変えているが、当時は強い力を持つていたそうだ。

血神の主な仕事は、村民に血を授けること。週に一度ほど、村民が捧げた湯呑み一杯の血を飲み干し、その湯呑みに半分程度自分の血を注いで元の場所に置く、というのがならわしだ。そういう決まりごとの一つに、10歳まで女物の着物を着るというのもあった。女性である初代を模して力を強めるとか、自分の身体を依代にして初代を降ろすとかの理由があるとされている。これが、夢で見た子が女の子だと勘違いした原因だった。

血神の血には回復能力があり、それを飲んだり浴びたりすると怪我や病気がみるみるうちに治る。だから村民は、授けられた血神の血液を患部にかけるなどして恩恵を得ていた。

しかし、2代目、5代目、10代目と、狂犬の血が薄くなっていくにつれて力も弱まつていった。

赤い目は血神の力の象徴とされている。実際血神の歴史書には、赤い目を持つ血神はその親や子より力が強く、特別にさまざまなことができたと記されていた。例えば、目を合わせるだけで人を惹きつけ、言うことを聞かせることができる。姿かたちを変えられる。赤目でなくても人間離れした生存能力や肉体能力を持つ者は多かったが、赤目は格が違うのだ。

しかし、ここ200年あまり赤目が産まれることはなかつた。これは狂犬が言つていた話だが、初代は種族特有の赤い目を持つていたのが、世代を追うごとに赤目が産まれることが減つていつたらしい。

そんな折に産まれたのが31代目血神『白蛇』、僕だつた。僕は何世代かぶりに産まれた赤目で、しかもとりわけ力を持つていた。中でも回復能力が高く、再生の象徴である『蛇』が名前に入るほどであつた。人を惹きつける能力は赤目にしては弱かつたが、制御の方法を教える者もおらず人と接する機会もなかつたために暴走気味になつてしまつた。

まっていた。これは浦原輝夜になつても変わらず、幼少期には相手を無条件に惹きつけた。無理やり惹きつけられた人々は、自分の感情に頭がついていかず混乱し、しばしば暴力という形で処理しようとする。幼稚園で受けた理不尽な暴力は、つまりそういうことだつただ。

最もこの力の餌食になつたのは、僕の血の繋がつた父親だろう。父は僕が産まれてすぐ、僕に人を狂わせる能力があることを悟つていた。だから僕を部屋に隔離して、村人にも被害が及ぶのを防いだのだ。

これで万事解決かと思われたが、血神にだつて食事は必要だ。そして、食事を僕の部屋まで運ぶ係として、父親は毎日僕に会いにきた。父は暴走したままの赤目にじわじわと侵されて、最後には実の息子を殺さなければならぬという思考に至つた。

そうやつて部屋の外で僕を殺す計画を立てているのを、僕は扉越しに聞いてしまつたのだつた。

父は僕のことをまだ小さな子供だと思つていた。実際、当時も今と同じ9歳で父から見れば幼いだろうが、暇な時間のほとんどを読書に費やしていた僕の頭は大人の使う難しい言葉を理解できるようになつていたのだ。

それでも、僕は聞き間違いだと信じて過ごしていたのだが。
結局あの日、父に殺された。

それが10年前の今日の話。
僕の、本当の誕生日だ。

第八話：秘技『二人喋り』

「とりあえず、僕が話せる範囲は全部話したかな」

そうやつて締めくくり、お父さんとお母さんの表情を見る。正直、深夜に突然やるような話じやない気はしている。思い出したばかりでまとまつてないし、実の父親に閉じ込められ殺される計画を立てられていましたなんて重すぎる。

「……そだつたんスね。辛い思いをして、大変だつたでしよう」

先に口を開いたのはお父さんだつた。ヘラヘラとした顔ばかり見ていたが、今は悲しげに眉をハの字に歪めている。お母さんもいつもはしゃんと伸びた背中が丸まつていて、頃垂れているように見える。「すまん。お主が拾い子じやということを伝えられんかつた」

「あ、それはちょっと気付いてた」

「ええ!? どうやつて伝えようか悩んでたのに」

僕の言葉に、さつきまで真面目な顔をしていたお父さんがずつこける。

僕をまつすぐ見て何を言うのかと思つたら、二人ともそんなことを気にしていたのか。二人と僕とじや全然似てないから、血が繋がつてないと知つてすつきりしたくらいなのに。傷つけないようによくしてくれたことに少し涙が出そうだつた。

「ところで、お話に出てきた狂犬サンというのはこのくらいの刀でいいんスかね」

お父さんが手を前に出して『このくらい』を表現する。その大きさは間違いくなく10年間ずっと一緒にいた刀だ。普通の刀の大きさは知らないが、狂犬は小回りが効いて手に馴染む気がして好きだつた。

「あつたぞ、輝夜」

いつのまにか席を立つていたお母さんが刀片手に戻つてくる。柄の装飾もあるときのままだ。何度も握り直して手触りを確認する。

『久しぶり、白蛇。……いや、輝夜かしら?』

『狂犬、久しぶり! ごめんね、忘れちゃつて……』

『いいわよそのくらい』

10年も忘れていたというのに、狂犬は笑つて許してくれる。この声だ、僕が浦原輝夜になつてから何度も聞いたのは。ずっと一緒にいたのになんで忘れていたんだろう。

「あの日のあのあと、どうなつたか知つてる？」

『知つているけど、いいの？　そこの二人は』

『え、とよくわからないままお父さんとお母さんを見ると、「ええと、狂犬サン？　と話してるんスよね……？」と言われた。お母さんも刀に目を凝らすばかりで、声が聞こえたような反応はない。

「もしかして、狂犬の声は僕にしか聞こえてない……？』

「……そのようじゃな』

これは予想外だった。白蛇時代は、食事を届けに来た父に『この刀、口が悪いぞ』と嫌そうな目で見られたものだ。どうやら相性が悪かつたらしい。父はあまり血神への信仰心がなかつたようだから、おおかた悪靈扱いでもして機嫌を損ねたのだろうが。

しかしながらこの二人には聞こえないのか。

『それはね、血が足りてないからよ。一週間に一度村人から血をもらつていたでしょう。血神はそれを力に変えていたの』

狂犬は昔のように気取つた喋り方で教えてくれる。そういえばたしかに浦原輝夜になつてからは血を飲むなんてしていてないけど、あれは儀式のためじやなかつたのか。

「血が足りなくて力が出せないんだって』

「ふむ、じゃあ飲みますか？　アタシの血を』

「ううん。僕が代わりに言つたらいいことだし』

目を細めて首を差し出すお父さんにバツサリ言い切る。今まで人の身体から直接血を飲んだことがなくて怖いなんて、10年間湯呑みから血を飲んでいた僕が言つても説得力がなくて言えないが。

『白蛇はあのとき、復元不可能なくらいに切り刻まれてしまつたけど。白蛇の父親が肉片をまとめて袋に詰めて、隣町のゴミ箱に捨てちやつたのよ。私と一緒にね』

狂犬から語られたのは、僕が白蛇として一度死んだ日の話の続きをだつた。急に話すものだから二人は一瞬なんの話かわからなかつた

ようだが、次の瞬間には真面目な顔をして耳を傾けていた。

『『ただの肉片でも、近くにあつたら少しづつ元あるように戻つていく。血神のなかでも特に回復能力の高い白蛇ならなおさらね。それでも全快には程遠い。それで完成したのが——』』

「記憶を失った乳児の姿、というわけか」

なるほど、僕は結局死んではいなかつたのか。死にきれなくて、でも元の10歳のかたちにはなれなくて、なんとかギリギリ構築できる姿になつたと。全部見ていたという狂犬が言うのだから本当のことなのだろう。

「儂が輝夜を拾つたのは、ゴミ箱の近くじやつた。赤ん坊は下半身にゴミ袋を巻いて、すうすう寝ておつた。それが10年前の明日、名目上の浦原輝夜の誕生日のことじや」

狂犬とお母さんの話で、ようやく血神『白蛇』と浦原輝夜が繋がる。10年前、およそ現代日本では起こり得ない不思議な出来事が、それでもたしかに起きたのだ。

昨日までの、ただの浦原輝夜として生きてきた僕に言つたら、馬鹿馬鹿しいと一蹴されるだろうな。想像に難くないことを考えて、それから急に眠くなつてきた。

「ああ、深夜だからね。今日はまた寝ちゃいましょ。それでまた明日、話せばいいんですよ」

瞼が重たくなつていくのに気づいたお父さんが、頭を撫でる。愛情表現が激しいいつもとは違つて、ゆつくり労るような手だ。閉じた目にお父さんの優しい声が沁みていく。

「うん……おやすみ」

かろうじてそれだけは言えただろうか。言つたつもりで言えなかつたかもしないが、それでいい。今の僕には、ちゃんと明日が来るのであるのだから。

第九話：ハツピーバースデートウーュー！

時は飛んで、次の朝。土曜日である。

テツサイさんが起こしてくれる時間は平日より遅めだが、僕はなんと平日よりも早く起きてしまった。昨日深夜にあれだけ長話した翌朝だから、それはもう遅起きの限りを尽くすものだと思つていたが。

しかたがないから顔を洗つて寝癖を直し、居間を目指す。朝も早い、いるのはテツサイさんだけだろう。せつかくだからテツサイさんにも昨日話した内容を言つてしまふか。ジン太と雨にはまだ早いかもしれないし嘘だと馬鹿にされるかもしれないが、テツサイさんはちゃんとした大人だからきつと大丈夫だ。……見た目と口調だけは、ちゃんとしてるとは言いづらいけど。

「おはよう、輝夜」

「おお、早起きじゃのう」

「な、なな、なんで一人がもう起きてるの……!?」

全く予想していなかつた人物が二人もいて、三歩後ろによろけた。そんな……。

眉をひそめたお母さんに「化け物でも見たような目をするな」とチヨツプを食らう。そういえばお母さんはそんなに寝坊常習犯じやなかつたことを思い出した。朝大抵いなかつたからイメージがついていたのだ。

一方、お父さんは扇子で隠しながら笑つてゐる。この時間に起きていることはまずないので、言われちゃつた、程度なのだろう。

「おや、輝夜殿。おはようございます」

「おはよう、テツサイさん。うわ、それ今日の朝ごはん？　でもなんでこんなに豪華な……？」

奥からテツサイさんが顔を見せた。手には皿が乗つており、いい匂いがしてくる。しかしそれはいつもの一汁一菜ではなく、しかも和風でもなかつた。

レタスとトマト、卵にマヨネーズ、そして大きなトンカツ。それぞれが綺麗に挟まれたサンドイッチが並んでいる。それに、スクランブル

ルエッグも。どれも、少し前に僕が食べてみたいと話した品だつた。

「今日は輝夜殿の本当の誕生日だそうではありませんか」

どうやら、二人がテツサイさんにも話してしまつたようだ。手間が省けたといえばそうなのだが、ちょっとした決意が勇み足になつてつんのめる気持ちになる。

テツサイさんは僕の生い立ちを聞いたはずなのにいつもと全く変わらない。ほとんど動かない表情筋を、だけど少し緩ませている。普通の人ではない僕を、受け入れてくれたのだ。半分わかつたことだけど、僕だつて未だ受け入れきれてないほどの過去をすんなり受け入れるなんて。

喜びのエネルギーを何かに変えたくてテツサイさんの持つ皿を代わりに運ぼうとしたら、後ろから手が伸びてきた。

「はいはい、今日の主役が働いちやダメでしょ」

そのままお父さんがテーブルに置く。お父さん、いつもは箸より重いものなんて持てないとか言つて全然手伝わないのに。そのままお母さんに肩を掴まれ、なすがままに座つてしまふ。

「ダッセー、一人で座れもしないのかよ」

「気にしないでくださいね……。手伝わされてイライラしてるだけなので」

さらに台所からジュースを手にしたジン太とコップを持った雨がひよっこり出てきた。

みんな起きてたのか、僕を祝うために？ 僕の本当の誕生日を知つたのは今朝だろうに。テツサイさんに起こされて寝ぼけ眼をこする二人を思い描く。

「あー！ 笑つたなこの！」

「ジン太殿……！」

ジン太がテツサイさんにしばかれる。口が緩んでいたのがバレてしまつた。今まで僕の誕生日は明日で、それで10年弱もやつていたのに。それなのになんで今日お祝いしてくれるんだろう。

「ほら、主役は笑つて『ありがとう』つスよ」

「みんな……あ、ありがとう！」

あれから、昨日の隠しきれていなかつたプレゼントをもらつた。大きいから何かと思えば低めの本棚で、そういえばこの間本が入らなくなつたと嘆いたことを思い出す。

しかし中身ではなく収納グッズかと少しがつかりした矢先、お母さんが持つて来たのは10数冊の本だつた。一ヶ月くらい前にあつたアニメの原作だ。アニメ最終回よりあと展開も載つていて、珍しく大はしゃぎした。

本棚は囮で、本命は小説だつたらしい。せっかく演技までして驚いてあげようと思ったのに、素で驚いたし喜んでしまつた。またこれでジン太あたりからいじられるのかと思うと憂鬱だが、『今日はすごく頑張つてた』と言う雨に免じて許してやろう。

ひとしきり騒いだと、それぞれがやるべきことをするためにわかれ。ジン太と雨は掃除、テツサイさんは皿洗い。お母さんはいつのまにかいなくなつていた。僕も何かしようと自分の部屋に向かう途中、お父さんに呼ばれた。

「輝夜が頑張つて秘密を教えてくれたので、アタシたちも秘密を教えます」

言える範囲でだけどね、とお父さんは緩く笑つた。何度聞いても絶対教えてくれないだろうお父さんが、自発的に話をしてくれ。拾い子だということが判明する前から少し疎外感を感じていた僕にはとても嬉しいことだつた。

どんな話をされるのが皆目見当もつかないが、たまにお父さんやお母さん、テツサイさんが暗い顔をして話しているところを見たことがある。もしかしたらそれを僕にも教えてくれるのかも知れない。そのときは、僕もみんなみたいに真摯に受け止めてみせよう。

今は持つていらない狂犬が、よかつたわねと笑つた気がした。

第十話：違う世界と罪の話

「来たか」

集合場所はお父さんの部屋。入ったことは数えるほどしかない。狂犬を握りしめながらもう片方の手で扉を開けると、お母さんが人間の姿で脚を組んでいた。奥の椅子にはお父さんも座っている。家中でも被つていることの多い帽子を、いつもより目深に被つていた。

「あの、秘密つて、」

「その前に、これを飲んでくれ」

「えっと、これは……血？」

「うむ、狂犬の話も聞きたいからの」

差し出されたのはコップ。中には暗い赤色の液体が半分ほど入っていた。この10年間で血を飲むのはおかしいという常識が確立されていても関わらず、僕はすんなりそれを手に取り口を当てるた。

久しぶりに飲んだ血は、美味しかった。当時は味など関係なく義務として飲んでいたけど、10年も飲んでないと身体が欲しがるのか？「狂犬サン、喋つてみてもらえます？」

「ええ。私が狂犬、初代血神『狂犬』よ」

聞こえるかしら、という問いに両親は頷いた。

どこから話しましようか。そう言つて切り出したのは、あの世に住む死神という存在の話。同じ神でも、死神は現世の平穀とバランスを守るために神らしく、虚という悪霊を倒すことが主な仕事だそうだ。「アタシも夜一サンも、死神だつたんです」

「テツサイさんも？」

「あやつも似たようなもんじや」

物語のなかの出来事としか思えないが、全て本当のことなのだろう。こういうところでふざける人ではないし、自分自身が作り物じみた過去を持つている。なにより、名前は知らなかつたが悪霊のようなものを見たことが数回あったのだ。信じないわけにはいかない。

そこで、狂犬が初めて口を挟んだ。

「バランスを守る、ね……。死神つて黒い袴を着てたりするのかし

ら

「はは……さすが狂犬サン。察しがいいつスね」

お父さんの話を先読みしたのか。あの意外と切れるお父さんの、しかも秘密の話を。まさに、さすが狂犬だ。……あれ、お父さんは狂犬と話したことがないはず。どうして『さすが』なんだ？

頭にハテナが浮かんでいたのが見えたのだろう、お父さんはその話はあとつスよ、と帽子を被り直した。狂犬もそれ以上追及するつもりはないようだから、大人しく聞くことに徹することにしよう。

「では気を取り直して、秘密のひとつ目。実はアタシたち、罪人なんですよ」

「100年ほど前のことじゃ。ある男の策略によつて犯罪者に仕立て上げられ、儂らはあの世から追放された」

「放つておくと被害は確実に増えていく。それを防ぐために、100年経つた今でも真犯人を捕まえる対策を練っています」

少し笑つてしまつたのがバレていらないだろうか。馬鹿にしているわけではない、似ているからだ。親子とも住む場所を追われていたなんて。顔も性格も似ていなくていいのに。

「ふうん。そんなこと教えて、私たちに何をさせたいの？ 引きこもりの輝夜に戦闘員はお勧めしないわよ」

「せ、戦闘員？ そんな物騒な……」

なぜかずつと機嫌の悪そうな狂犬が言う。たぶんお父さんと相性が悪いんだと思うけど、それは僕にもダメージが行くからね？

狂犬の言う通り、僕は引きこもりだ。幼稚園の頃はお絵かきばかりし、小学生になつたら本を読みゲームをする。白蛇時代も部屋からほとんど出たことがなかつたのもあつて、おかげで今では立派な運動嫌いの運動音痴になつてしまつたのであつた。

「大丈夫じや。輝夜にそんなことさせんでも儂らでなんとかする」「物騒なのは否定しないんだ……」

「あつそ。輝夜に危ない真似させたらただじやおかなかつたけど、今までいいのね」

僕もそうだけど、両親にもあまり怪我するかもしれないことはしてほしくないんだけどなあ。でも100年の努力を無駄にもしてほしくない。

なら、狂犬が言うとおり僕にできることは今までと同じように普通に生活するしかないらしい。あとは、敵に見つからないように目立つことは避けるくらいならできそうだ。

「あと、できれば知らない人と話さないようにしてくれる?」

「は、話さないよ! 学校でも言われてるし」

「いつ輝夜に手を出すかわからないんだよ、手段なんか選ばないだろうから」

僕を子供扱いしてるのかと思ったが、真剣に言っているらしい。
知らない人とは話さない。学校で耳にタコができるほど聞く話だけど、今はお父さんの敵が僕を人質にするかもしれない。浦原商店のみんな以外の人たちは基本疑つてかかるともいいくらいだ。

僕が頷くと、お父さんは眉を下げる笑った。

第十一話：実は私、

「さて、秘密ふたつ目です。——実は、過去に狂犬サンを見たことがあります」

え、と無意識のうちに口から音が出た。狂犬を見たことがある……？ 死神は何百年と生きるのが常識で、お父さんも死神だ。狂犬も500歳をとうに超えていると聞くし、一回くらいは会ったことがあってもおかしくない、のか？

「……私は貴方に会ったことはないわ」

「そうでしょうね。アタシが一方的に知っているんスから」

「ああ、そういうこと。どおりで元の身体に戻れないわけだわ」

お父さんと狂犬が、僕にはわからない高次元の話をしている。同級生よりは大人びているつもりでいるが、まだ10歳になりたての僕が何百歳という二人の会話を理解しようなんておこがましいのかもしれない。

「ええ。でも本題に入る前に、昔話をしましようか」

昔々あるところに、死神たちがおりました。いつものように現世に降りて虚を倒していたら、なにやら男が暴れているのを見つけます。

『何をしているんだ！』

『人を食つてるだけだ。俺たちにとつてこれは食いもんだから当然だ』

『お前だつて人だろう』

『何を言つている。俺は人じやない』

『男は自分をこう呼びました。

吸血鬼、と。

バランスを重んじる死神は、上司に相談しました。これでは世界は吸血鬼に滅ぼされてしまう、と。吸血鬼と名乗る男はあまりに強かつたのです。

出された結論は、吸血鬼を殲滅するというものでした。こうして、各地に散らばつている吸血鬼を探し出し、殺し、数十年後には目標は達成されたのでした。

「これが、700年前の話です。狂犬サンにも、心当たりはあるでしょう？」

「……どういうこと？ 吸血鬼ってアニメに出てくるような人の血を吸う魔物でしょ。僕たち血神は似てるけど全然違うよ！ だつて、」

「いいわ、輝夜」

お父さんが何を言いたいのかわからない。僕が取り乱して問い合わせるのを、狂犬は一言で制した。突然吸血鬼の話をして、それを狂犬に振るなんて。まるで狂犬が吸血鬼だと言っているみたいじやないか。

「みたい、じゃないのよ。私は紛れもなく純血の吸血鬼。……血神の一族は、本当は吸血鬼の末裔よ」

今まで騙してて、ごめんなさい。どんなときでも快活に笑っていた狂犬の、初めて聞く声。今までというのは、20年前に僕と出会つてからか。はたまた、血神教が始まつたころからか。

どうして血神として生きたのかもわからない。何も知らない僕は、何を許せばいいのだろう。

現人神と吸血鬼で何が違うんだと思うかもしれないが、神と鬼だ。信仰してくれている人もいた。それを僕が裏切つてしまつたのだ。神を騙る鬼。なんて罰当たりなんだろう。

「狂犬サンをアタシが見たのは、あの世でのことです。アタシは技術開発局……研究室のようなところで働いていて、狂犬サンはその奥の奥に厳重に保管されていました」

狂犬がなぜあの世にいるんだ。ずっと宝刀として血神と共にいたはずなのに。本人の表情を読みたいのに、ちらと見ても血のようない鞘が光るだけだ。

「何百年も前のことだけど、私は死神に殺されたのよ。貴方みたいにね」

僕みたいに。執拗に切り刻まれて、ということだろうか。吸血鬼という種族が強すぎるから。

「正確には、殺されかけた。一命は取り留めたわ。だけど、目が覚めたときには身体はなかつた。そのとき私が持つていた刀と同化してい

たのよ。……きっと、刀に血が染み込みすぎて、身体に戻れなかつたのね』

「アタシは、『完全に死んだと判断し身体を回収したが、何故か腐らずそのままの状態を保つていて』と聞いています。そして、現世で狂犬サンの血が生命活動を続けていたために身体もそれに応えようとしていたのではないか、というのがアタシの見解つス』

常識をまるつきり無視したとんでもない話が展開されて、僕は追いつくのがやつとだ。

ええとつまり、狂犬は昔吸血鬼だからという理由で死神に殺されかけたけど、精神は刀に移つてしまつてその隙に身体をあの世に持つていかれ、戻れなくなつた、ということか？

「それじや、お父さんは狂犬の本当の見た目を知つているつてこと……？」

「……うん」

「どんなのだつた？ 僕、見たことがなくて」

これは、狂犬が昔は刀ではなかつたと聞いたときから気になつていたことだつた。何回聞いても『さあ。覚えてないわ』の一言ではぐらかされ、次にはもう晩ごはんの話にすり替わつていたのだ。

「似てたよ。輝夜にそつくりだつた。……成長すればするほど、もしかすると血縁関係にあるんじやないかと思うくらいに」

ただ見た目を答えるだけというのに、お父さんはあまりにも辛そうに目を細めた。しばらく口を開いていないお母さんも眉間に皺が寄つてている。

「一つ聞いていいかしら。貴方たちが輝夜を拾つたのは、吸血鬼の血が入つていたとわかり次第殺すため？」

「違う！ 最初は、刀を握りしめて眠る赤ん坊に興味を惹かれただけじゃつた。特殊な靈圧を放つているとわかつたのは家に連れて帰つてからじや」

こんなことになるとわかつていたら、僕のことは拾わなかつたのだろうか。吸血鬼だと知つていたら、その場で斬り伏せていたのだろうか。二人の苦虫を噛み潰したような顔を見て、思つてしまつた。

この10年で受けた愛情は本物だと思つていた。しかし、みんなは吸血鬼の力に怯えながら接していたのかもしれない。そんな疑念に支配される。あり得ない、そんなわけないのに。

僕の表情から何を考えているかわかったのか、お父さんが震えた声で言う。

「ボクは、君が何者でも君のお父さんだよ。大好きだ。じゃないと10年も一緒に生活なんてできないよ……」

「お父さん……本当、だよね？　僕は、お父さんの子供でいいんだよね……？」

「もちろん。君は浦原輝夜で、ボクと夜一サンのただ一人の息子だよ……」

優しく抱きしめられる。いつもはあんなに力いっぱいなのに。いつもはあんなに顔を埋めた羽織がじわじわ濡れていって、泣いていることを知る。

「……私の可愛い輝夜を傷つけたらただじゃおかないわよ。今日まで隠しひこがあつたことも、許してないんだから」

「当たり前じゃ。我が子を護るのが親の役目じゃからの」

第十一話：『飯に勝るものはなし

「おー、よお来たな輝夜！」

「ひよ里さん！　おはよ」

鞄を持つて目的地のあたりを歩いていたら、いつもの赤ジヤージを翻したひよ里さんに声をかけられた。財布を手にしているから、これから買い出しなのだろう。

「ハゲ真子、輝夜來たで！　とつとと案内せえ！」

「おうー！　つてハゲちゃうわ！」

何もない空間から返事が返ってきた。真子さんのものだ。ドタドタと足音まで聞こえて、急がせて申し訳なく思つてしまふ。

ひよ里さんは呼びつけるだけ呼びつけておいて、全く気にせずにどこかへ行つてしまつたけど。

「ハイハイハイ～つと、こないだぶりやな」

「うん。お邪魔します」

こつちや、と手を引かれて建物内に入る。結界のようなものが張ら
れているらしく、入るにはこうするしかないそうだ。

「おー、輝夜ちゃんじゃねえか」

『輝夜ちゃん』はやめてつていつも言つてるでしょ！

「なんや、今日来るんやつたんか。菓子あつたつけ」

「あるよー、ここに醉昆布が！」

「醉昆布は小学生にやる菓子じゃねえよ」

僕が来たとわかると途端に騒がしくなる。頭を撫でてきたりお菓子を渡そうとしてきたり、親戚のおじさんおばさんみたいだ。親戚はいないから漫画の知識だけど。

お父さんといいここの人たちといい、周りの大人は頭を撫でるのが好きな人が多すぎる。子供扱いしないでほしいが、こう思つている時点で子供なのだろう。

「そういうや聞いたで？　輝夜、前はカミサマやつとつたらしいやんか」

「あたしも聞いたわ。血神やつたつけ？　立場利用して民にあんなことやそなことをしてたんやろ」

「してないよ！ なんでそうなるの！」

冗談や冗談。真顔で冗談言いなや、わかりづらいんやお前のボケは！

真子さんの話題に乗つかるようにしてリサさんが口を挟んで、本来話題の主役である僕そつちのけで話が進んでいく。

なんでその話を知ってるんだ。あの日から一週間しか経つてないぞ。どこから漏れたか考えて、あの胡散臭い帽子が過ぎつた。僕になんの相談もなく教えるなんてまったくあの人は……！

でも、お父さんがわざわざこの人たちに教えたということは、この人たちは味方だということ。今まで仲の良かつた人を疑うのは辛いから、そう考えるとありがたいとも言える。

……それでも勝手に話すのはあり得ないけど。

「私の輝夜を困らせないでくれるかしら？」

「うおつこれが狂犬かいな……」

僕の鞄から覗く扇子を見て真子さんが後ずさる。

あのあと、どうしても狂犬を持ち歩きたいけど刀を持ち歩くのは……と言つたらお父さんが扇子状してくれたのだ。どうやつたのかはわからないが、狂犬が狂犬たらしめるのは刀と鞘をコーティングするように固まつた血なので、それを扇子の形にするだけで良かつたらしい。全部お父さんの言つていたことで、理解できないのが悔しい。

刀 자체が元々脆く、網目状のひびの隙間にびつしり血が行き届いていたと言つていたから、『だけで良かつた』という言葉とは裏腹にかなり難しかつたのではないかとは思う。

何はともあれ、狂犬が持ち運びに適した大きさと形になつて、僕は嬉しくてどこにでも持ち出すようになつたのだつた。

真子さんがビビリつつも狂犬に話しかけては辛辣に返されて撃沈しているのを眺めていると、いつのまにか奥の部屋に行つていた拳西さんが顔を出して言つた。

「輝夜、昼メシできるけど食うか？」

「食べる！」

昼ごはんは家で食べたが、拳西さんのご飯も美味しいから仕方ない。育ち盛りの食べ盛りなのだ。

第十二話：親の心を知る※実の子ではありません

「今日は何するんだ？ 輝夜ちゃん」

「だから輝夜ちゃんは……もういいや。今日は宿題やりに来た」

腹ごしらえも終わってのんびりしていたら、ラブさんが隣に腰掛けてきた。基本いい人だけど、僕を名前でいじつてくるしがゲームを勝手にやるからちよつと構えてしまう。

僕がここに来るのは、大抵浦原商店から大人がいなくなるときだ。お父さんとお母さんがいないのはよくあるが、テツサイさんまでいなことはほとんどない。外出しなければならない仕事はできる限り平日に済ませているらしいのだ。二人も見習つてほしい。

しかし今日はどうしても家を空けてしまうため、真子さんたちのところへ来たというわけだった。

ここに来てやることはバラバラだ。ゲームをやつたり本を読んだり、今日みたいに宿題をしたり。そしていつも全く捲らない。ひよ里さんになんやそれと言われ、リサさんにからかわれ、ラブさんに奪われ、白さんに突撃され、真子さんに笑われる。

ハツチさんとローズさん、拳西さんは僕の邪魔をしない良い人梓だ。ローズさんはうるさいけど。

「なんや輝夜、まだおつたんかいな」「おかえり。お邪魔してまーす」

例によつて全然宿題が進まず半ば諦めムードになつていると、ひよ里さんが帰つてきた。大きめのエコバッグを提げているから、やはり買い出しか何かだつたのだろう。

「あ、あれ買うたからやるわ。苺大福」「いいの？」

「あのハゲのやつやから輝夜は気にせんできねん」「よおないわ！ あとハゲてへんわ！」

うわ、これは掴み合いの喧嘩になるやつ……！ と思つたそのとき、真子さんが『まあ輝夜にやるならええわ』と言つた。ひよ里さんもファンと鼻を鳴らして袋に大福を入れて僕に手渡す。嬉しいけど他

のみんなはこれにお菓子を詰めるのやめてくれる？

「ねえ、なんでいつも優しくしてくれるの？ 毎回なんか貰つてる気がするんだけど」

「それはな、ここにいるみーんな輝夜のことを可愛がつとるからや。親心つちゅーか、兄心つちゅーか……」

みんな、僕のことを息子だか弟だかだと思っている、ということか？ ピンとこないな。兄弟みたいな存在はいるが、ジン太と雨にいつも何かあげようと思つてゐるわけではない。特にジン太。

わずかに顔を赤くして答えた真子さんは、自分の頭をガシガシかいてそっぽを向いた。それから、ひよ里さんを見て口を開く。

「まあ、ひよ里は中身見たら輝夜の方がにーちゃんつぽいけどなグホア！」

自分の発言に照れたのか、ひよ里さんをいじつて自滅した。何してるんだか……。

「真子はああやけど、さつきの発言は大体本当」

「リサさん！」

「向こうにいたときはまだ子供と触れ合う機会もあつたけど、現世に来てからは交流そのものをほとんど絶つとるから。あんたが来るつてだけでみんないつもの1・5倍うるさくなる」

リサさんはうざいといったらありやしないといつたふうにため息をついて腕を組んだ。しかしその表情は、あまり喜怒哀楽を顔に出さない彼女にしては非常に珍しい、穏やかな笑顔だった。

初めて見る顔に惚けていると、それに気づいたリサさんがまたいつもの無表情に戻る。

「ほらほら、もう暗くなるころやし帰り」

「そうだね、今日はもう帰ろうかな」

「お！ 帰るんか。また来いや」

「じゃーねー！」

何人かに見送られて建物を出る。きっとみんなもお父さんやお母さんと同じように、騙されて裏切られてここまで来たんだろう。それでも明るくて楽しくて、すごい人たちだ。

「……ん?」

貰つた袋から、お菓子以外の何かが見えた気がした。うつかり別のものも持つて帰つちやつたかと思つて慌てて袋を漁ると。

「エロ本……」

前言撤回。

あの人たちは変な人たちである。

第二章 物語の裏で彼は何を思う

第十四話：脳内リサさんの言うことは大抵嘘

僕の10歳の誕生日にあつたあれこれから数ヶ月。季節は回つて春になつた。

小学五年生になつてクラス替えもあつたが、一番仲が良いといえる黒崎姉妹とまた同じクラスになれたのは嬉しい。知らない人ばかりだと○人組になれと言われたときに困るのだ。

ともかく。僕は特に問題もなく、五年生最初の一ヶ月を過ごしたのだった。

最近、お父さんが怪しい。

目つきや服装はいつも怪しいのだが、そうではなくて。

僕は、お父さんが駄菓子屋の店番をちゃんとしているところを見たことがない。なのに最近、誰かが店に来るたびにすつ飛んで応対するのだ。しかも、三日に一回来るか来ないかの客が、最近は二日に一回程度に増えている。

今日も、お客様が来たとテッサイさんに呼ばれる前に、お父さんは立ち上がって店へと向かつていつた。

誰も言及しないところを見ると、お父さんたちを陥れたという男の件を進めているのだとと思うが。しかし脳内リサさんが何度も『愛人やろそれは。ああいうタイプは巨乳に飽きて貧乳や男に走るんよ。あたしにはわかる』とほざく。脳内リサさん……。

そんなわけないとは思いながらも不安に思つた僕は、一向に帰つてこないお父さんを見に行つた。

「おい浦原。これはいくらだ」

「つうか、こんな駄菓子屋の店先で話してていいのかよ」

「だあいじょうぶですつて！ 全く二人とも心配性なんスから～」

そこには、貧乳と男がいた。

う、嘘だ……。そもそもお母さんとお父さんは結婚どころか付き合つてすらないけど、だからつて貧乳や男が好きとは聞いたことがな

い。僕がリサさんから押し付けられた工口本をあげたときも、胸の大きい人が表紙のほうが嬉しそうにしていた。表情はずつと焦つたような困ったようなものだつたが、僕の目は誤魔化せない。つい先日もそうだつたから、きっと性的嗜好は変わつていはないはずだ。

「なあ、そこの。何してんだ」

じつと見て考へていたら、男の方が声をかけてきた。男は、景気の良い明るいオレンジ色の髪の毛をしている。他に特筆すべきは目つきの悪さだろうか。他は普通の高校生らしい。制服を着ているから、少なくとも学生なのは間違いないだろう。

じゃあお父さんは高校生に手を……？

『そりゃあ高校生に手くらい出すで。100年以上生きてたら高校生の一人や二人、小学生の三人や四人普通や』

脳内リサさんがまた何か言つてゐるが、さつきのこともありうつかり信じてしまいそうだ。いやいや輝夜、お父さんをよく見ろ。そんなことしそうに見えるか？ ……見えるから困のだ。

「おい、大丈夫か？」

「うわあ！」

気づいたらオレンジ頭が目の前にいた。驚いて飛び上がつた僕を見て、奥にいるお父さんが笑つてゐる。殴りたいのを我慢して、正面の男に向き直つた。

「……あの、そこにある人とはどのようなご関係ですか」

「ブツ」

つい頭が真つ白になつてしまい、思つてゐることそのまま口から出た。吹き出したお父さんはあとで絶対殴る。ジン太が。

「は？ いや、普通の客だけど」

あーでも、普通ではないつつーか……。

うまい言い方が思いつかないのか、そう言いながらその派手な頭をガシガシ搔いた。普通ではない。普通ではない……？ やつぱりそれつて、と思つたとき、ひとしきり笑い終えたお父さんがこつちに來た。

「この人は対死神のほうのお客さんだよ」

扇子で隠しているが、まだ目は笑っている。よく見たらうつすら涙の膜まで張られていて、どれだけ笑ったのかが窺えた。

「俺は黒崎一護。ようしくな」

くろさきいちご。聞き覚えがあるがどこで聞いたのか。身近な女の子が言っていたような……。雨じやなくて、遊子、夏梨……？

「あーー！『いちにい』さんだ!!」

「な、なんだ？ その足したら6になりそうな名前は……」

思い出した。黒崎姉妹のお兄さんとしてたびたび話に挙がる人だ。目つきが悪くて、オレンジ頭で、よく喧嘩を売られやすい。見た目も聞いた通りで、逆になぜ気づかなかつたのかと思うくらいである。

「で、お前はなんなんだ」

「僕は浦原輝夜って言います。遊子と夏梨とはクラスメイトで」「浦原……って、もしかして」

『いちにい』さんは、元々しわの多い眉間をさらにひそめて横を見る。「そうなんスよー！ 実はこの子、アタシの自慢のむす」「他人です」

即答した。

第十五話：おいしいご飯には勝てなかつたよ……

突然だが、今日は黒崎家にお邪魔している。

そこの娘さんたち——黒崎遊子と黒崎夏梨から誘つていただいたのだ。

僕が普段ゲームばかりしているのを知つて、『ゲームならうちにもあるから来なよ』『一緒に遊ぼう』と。友達のいない僕にはストレートな言葉は刺激が強すぎて、とつさにオーケーしてしまつた。

しかし、彼女たちは友達ではない。よく言つても『そそこそこ仲良しのクラスメイト』だろう。そんな僕が黒崎家に足を踏み入れていいのか。

『面倒臭いわね、とつと行きなさいよ』

そうして断るかどうか悩んでいたら狂犬に喝を入れられて、結局思ひ切つて行くことにした、というわけだ。ちなみに狂犬はお休み。定期的にお父さんやお母さん、テツサイさんに血をもらつていて今、一般ピープルそうな双子の前でうつかり扇子が喋ると大事件になるからだ。

自身乗り込んだゆえの緊張で胃が痛い。目の前には美味しいそうなハンバーグやコーンスープが並んでいるというのに。

「どうしたの？ ご飯食べたくない？」

「あ、いや……他人の家でご飯食べるの初めてで」

「具合悪いなら言いなよ」

頷いて箸を進める。小学五年生にしてこのクオリティとは……。将来はテツサイさんと並んで凄腕の料理人になるだろう。テツサイさんはそもそも料理人ではないが。

「どうだ！ 美味いだろう遊子の飯は」

全身で暑苦しいを表現したような二人のお父さんがこちらを見るが、僕の口にはご飯が詰まつていて頷くしかできなかつた。それでも意図は伝わつたのか、満足気に首を何回も縦に振つた。

「そういえば、この前『いちにい』さんに会つたよ」

『いちにい』さんつて、お兄ちゃん？』

「うん

所々はぼかして、駄菓子屋にクラスメイトっぽい人と来てたのを見たんだと言つたら、たいそう意外だつたのか二人とものけぞつて驚いた。二人のお父さんに至つては椅子から転げ落ちてしまつて、強打した脇腹を庇つて倒れている。

「大丈夫ですか!? ええと……遊子と夏梨のお父さん」

「二護のお父さんもあるけどな……つと」

一心でいいよ、と起き上がりながら言われる。ありがたい。呼び方を決めあぐねていたのだ。おじさんと呼ぶにはあまりにもおじさんすぎて傷つくかもしれないし。

「そんなことよりも! お、お兄ちゃんが駄菓子屋に……!?

「そ、そんなこと……?」

「そうだよ! 一兄が駄菓子屋なんて行つたらまた喧嘩売られるのにわざわざ行くわけない!」

一応、クラスメイトといったみたいだからとフォローしておく。

しかし、駄菓子屋に行つただけで家族にここまで言わせる黒崎一護、いつたい何者なんだ。喧嘩を売られるつて……。いや、喧嘩を売られるなんてヤンキー漫画だけだと思つていたけど、高校では普通なのかもしれない。それはそれで嫌だから、『いちにい』さんが特殊だと信じよう。

「ただいまー」

「おかえり!」

「一兄だ!」

先日聞いた声に、双子が同時に席を立つ。兄弟仲が良くてなによりだ。実は二人の一心さんに対する扱いを見て少し心配していたから、大丈夫そうで密かに胸を撫で下ろした。

「あ、こないだの」

「お、お邪魔します……」

冷静に分析していたが、僕は人見知り。ほとんど初対面の人と満足に会話もできない。前回は勢いで喋れてしまつたが、今は他人の家にいるという緊張も相まって全然舌が回らなくなつた。

向こうも年下の対応に困っているのか頭を搔いている。妹と同じ年齢なんだから気軽に話してよ、お兄ちゃんなんだろ。

「輝夜つづつたつけ。まあゆつくりしてけよ」

彼はそれだけ言つて二階へ上がつた。信じられない、この気まずい空気をそのままにして逃げるなんて。……もちろんこれは被害妄想で、相手の対応は特に問題ないのだが。

「もう、お兄ちゃんは愛想ないんだから！」

遊子が可愛らしく怒る。しかし後ろでは一心さんが悪い笑みを浮かべていて、なんだか背筋がぞくつとした。

「なあ、輝夜ちゃん」

「はい？　あ、いや、ちゃん付けはちょっと……」

「一護にこれ届けてきてくんねえか？」

これ、と振った手にあつたのは、手紙。真ん中にハートのシールが貼つてある。見た目は古き良きラブレターだ。

「なんですか、それ」

「俺が書いたラブレターだ！　これをあいつに渡してやつてくれ」

「は、なんで……？」

「ドギマギしてる息子をからかうため！」

暑苦しい顔で爽やかに歯を見せる一心さんに、変な帽子を被つた父親の姿が重なつて見えた。

第十六話：ぬいぐるみ趣味？

「……黒崎一護、さん。今大丈夫ですか」

「え？ ああ」

ノックを三回して、呼びかける。扉の向こうから返事があるのを確認してからノブに手をかけた。

「何か用か？」

「あ、えつと……これを、一心さんから」

しかたないから言われた通りラブレターもどきを渡す。しかし、ドギマギする様子はない。それどころか、苦い顔だ。

「悪いな、馬鹿親父のイタズラに巻き込んで」

大きく息を吐いて言われた言葉で得心いった。普通にバレていたのか。なんでも、すでに五回は同じ手口をしているらしい。流石に手口くらいは変えろよ。

そこで、ふと視界にオレンジが入った。もちろん黒崎一護ではない。

「……ぬいぐるみ？」

「あ」

彼は、目にも留まらぬ速さでぬいぐるみを引き出しにしまった。引き出しを戻すときに聞こえた断末魔のような声は、聞き違ひだらうか。

「何すんだー護ーー!!」

「喋んじやねえ馬鹿！」

……氣のせいではなかつたようだ。

「俺はコンつづーんだ。よろしくな」

ライオンらしきぬいぐるみが、机の上に仁王立ちしている。可愛いけど偉そうだ。

「僕は浦原輝夜。浦原商店つて知つてる？ あそこに住んでるんだけ

ど」

「俺もそこに——つてか、さては取り返しにきたのか!?」

僕が浦原商店と言うと、コンは目に見えて動搖しました。俺もそこ

に、ということは同じところで寝起きしていた？

しかし、動くぬいぐるみを見た記憶はない。知らないものを取り返しにくるわけもなく、僕はよくわからず頭にはてなを浮かべるしかできなかつた。

「あー、話せば長いんだけどよ」

見かねた一護さん（と呼ばせてもらうことになつた）が説明してくれる。

コンはもともと違法に作られた魂魄で、廃棄寸前だつたこと。一護さんたちが浦原商店で買つて保護していること。適当にぬいぐるみに魂を突っ込んだら動いたからそのままにしていること。

事前に死神や吸血鬼といった非現実的な存在を知らなかつたらふざけんなと言いそうな話だ。一文一文が意味不明すぎる。しかしこの世界はなんでもありだと知つている僕は、とりあえず信じることにした。実際ぬいぐるみが動いているわけだし。そして僕も喋る扇子を持つっているのだから、信じないわけにもいくまい。

「えつと、別に廃棄するつもりはないから、安心して

「……おう」

なんだよ、びびつて損したわ。そう言つてコンは床に大の字になつた。初対面の人の前で腹を晒せるとはなんとも肝が強い。人見知りの僕には真似できないな。絶対しないけど。

第十七話：犬も怖けりや母も怖い

「わん！」

「あー、もう！　くつつかないでよ！」

「わんわん！」

「だーかーらー！」

生ぬるい湿つた舌が顔を這う。背中には一匹、足元には二匹、そして胸にも一匹。小型ではあるが、犬が二匹も身体にひつついていると重くてしようがない。あと怖い。

足も動かせず、落とすわけにもいかず、しかたなくお母さんに助けを求めた。

「だつはつは、大人気じやのう」

……これだからお母さんと一緒に出かけたくないんだ。

今僕がどこにいるかというと、普通に道路だ。具体的に言うと、ペツトショツプへの道中の、特筆すべき点のないただの歩道だ。強いて言うなら、この辺りにしては若干歩道が広くすれ違いやすいくらいか。

それなのになぜ、僕がすでにペツトショツプ並みの数の犬に群がられているのか。それは、僕の体質のせいだ。そしてそれをなんとかするために、僕は今こうして犬に囲まれていたのだつた。

昔から、犬に好かれやすかつた。大型犬に襲われて大泣きし、お父さんに剥がしてもらつたこともある。おかげで今でも大型犬は大の苦手だ。

それが、最近になつて酷くなつたような気がするのだ。気がする、なんて軽いもんじやない。鳥も猫も虫も関係なく近寄つてくる。

そして先日、なんで突然犬以外も集まつてくるのかと鳥にたかれながら思つたとき、狂犬が言つた。

「ああ、それは赤目が原因ね。また血を飲むようになつて力が戻つたみたい。今まで以上に動物も人間も惹きつけるのは当たり前よ」あつさり、なんでもないふうに。狂犬にはこの目に浮かぶ涙が見えていないらしかつた。

とにかく、原因がわかれれば当然治す方向へ話が進む。僕だつて動物に纏わりつかれるのはこりごりだ。治せるものなら治したい。

隠しきれず口の端を上げながら『どうしたら』と狂犬に聞いた。

わからないと言われた。

それきり、なんの反応もなくなつた。ふざけんな純血の吸血鬼なら解決策知つてるだろとまくし立てても、酷いよ僕のこと大事に思つてないんだねと泣いてみても。狂犬は都合が悪くなると黙るのだ。わからないのは能力を当たり前に制御できていたからだろうけど、小学生の子孫の前で小学生みたいなことをしないでほしい。

そして、結局暇そうにしていたお母さんに助けを求めたら『能力を使わんようにするには、逆に使つてみたらどうじや』とそれらしい決策を出され、僕は嫌々ながらも外に繰り出したのだった。

目指すはペットショップ。ふれあいコーナーで犬に目を合わせて命令し、従わせるという練習をするために。

「す、すみません！ いつもは言うこと聞いてくれるんですけど……」「大丈夫、です……犬に好かれる体质らしくて」

犬たちの飼い主のお姉さんに笑いかけようとしたが、無理な体勢をとつていたのもあって乾いた笑いにしかならなかつた。それを見て、ようやくお母さんが助けに来てくれる。まつたく、これからペットショップに行くつていうのに今ふれあっててどうするんだ。

「これじゃキリがないのう。こうなれば強硬手段じや、捕まつておれ」僕に乗っている犬を降ろしては別の犬が乗るのを繰り返してストレスが溜まつたのか、お母さんは大きく息を吐いて僕を抱える。お母さんに抱えられるのなんて何年ぶりだ。じゃなくて、え？ もしかして、話に聞く瞬歩つてやつをするつもりじゃ。

親にお姫様抱っこされる恥ずかしさを感じる暇もなく、首に手を回した。その瞬間、とてつもないGを感じる。目なんか開けられない。こんなことをいつもやつてるのか？

そういえば、さつきの人からは僕たちが消えたように見えたのかもしれない。大丈夫なのだろうか。

現実逃避にも似た考えが過ぎたところで、やつと顔にばしばし当

たつていた風が止む。

「到着じや」

整った顔でニッヒ笑うお母さんに、怒る氣も失せた。

第十八話：「ぐつと尻に力入れて」と悩んだ b y 狂犬

お母さんに降ろしてもらい正面を見ると、ペットショップが目の前にあつた。瞬歩、恐るまじ。

何もなかつたように前を行くお母さんを慌てて追つて入店する。買う気もないのにふれ安いコーナーだけ行くのは失礼じゃないかと思つたが、お母さんは大丈夫の一点張りだつた。儂に良い案があるとは言うけど、お母さんの『良い案』は経験上行き当たりばつたりの悪い案であることが多い。本当に大丈夫なのだろうか。一発で出禁になつてしまつた、なんてことにならなければいいが。

「で、良い案つてなんなの」

「いいから見ておれ」

「いらっしゃいませ！ どんな子をお探しですか？」

接客業のプロが甘つたるく語尾を伸ばして話しかけてきた。反射的に挨拶しようとする僕をお母さんが手だけで止める。

「こんにちは。犬を飼いたいのですがこの子は動物と遊ぶのが怖いみたいで……。ふれ安いコーナーで練習させてもらつても良いですか？」

「は、はい！ もちろんです！」

誰だこの人は。気品があつてお淑やかで、穏やかな笑みを浮かべている。野性味あふれる顔立ちも、こうして見れば落ち着いた美しさを感じさせた。

さつきまで『服なんか着てなんの得があるんじや……。窮屈でしかたないわ、儂は脱ぐぞ！』って言つて暴れていたとは思えない。もちろん必死に止めたおかげで、今はちゃんと上下ともに外に出られる服装になつていてる。

言い訳も完璧だ。ふれ安いだけさせてもらうが、犬を飼う予定ではある。僕はたしかに犬と接するのが苦手だし、実際にふれあつているところを見られても問題ない。

しかし、いつこんな振る舞いを覚えたのか。僕の知る10年と少しの間、一度もこんなお母さんを見たことはない。

「儂も昔はお姫様だつたんじやよ」

お母さんは、言い訳は喜助に考えてもらつたがの、と豪快に笑つた。どこぞの令嬢かと見間違えるようなさつきの笑顔は見る影もない。長い付き合いらしいお父さんからは、昔からこんなのだつたつて聞いてるんだけど。嘘をついたとも思えないから、お父さんをも欺いたというのか。

「どうぞ、こちらです」

案内された柵の中では、可愛らしい子犬が駆け回っていた。数は五匹程度。内側に入るとみんながこちらを見る。目が合つたそばからこちらに来てのしかかられた。さつきの一の舞だ。

「……降りて！」

しかしさつきのように一方的にやられるわけにもいかない。すでに脚の半分地点にいる犬に目を合わせて命令する。どうだ、身体が勝手に動くだろう。

「わふ？」

効かなかつた。

他の犬でも試したし、違う言い方もしてみたが、どうしても言うことを聞いてくれない。重しのせいで僕の身体はほとんど横になつている。例えるなら、子猫に乳を飲ませている母猫のような姿勢だ。このままでは子犬すら恐怖の対象になつてしまいかねない。

「狂犬、なんかアドバイスないの……」

潰れかけた声で必死に助けを求める。するとようやく狂犬が言葉を発した。

「そんなぬるい言い方じや相手を従わせられないわよ。こつちのほうが上位の存在だつてわからせないと」

具体的なアドバイスが出てきちゃうのかよ！

「伏せ」

「わん」

僕の言葉に素直に犬が身体を伏せる。他の犬にもいろんな命令をし、全てが成功した。

「で、できたら！」

「万事解決じゃな」

狂犬のアドバイスをもとにやつてみるとコツが掴めたようで、能力をきちんと使えるようになつた。もう少し慣れたら能力を完全に使わないことも可能だろう。

軽く拍手してくれたお母さんに、ありがとうと素直な感謝を口ににする。すると、お母さんは一瞬真面目な顔をして、ふざけたことを言った。

「犬にできるということは、儂にもできるんじやろうか」

「……お母さんより僕が上位だと思わなきやいけないんだけど？」

何を言い出すのかと思えば。もしできたとしても、自分の母親が命令に従うのは心理的に嫌だ。

「いいじやない。やつてみたら？ 吸血鬼としては弱いようだけど、どの程度か知つておかないと」

「そうじやそうじや！ 試しにやつてみろ」

「はあ……。わかつたよ」

騒がしい二人に押し負けて領いてしまう。雰囲気は違うけど、この二人は結構似ているところが多いのだと実感した。こんなことで実感したくはなかつたが。

一呼吸置いて、心を落ち着かせる。相手は格下、相手は格下。じゃあ行くよと言つて息を吸つた。

「座れ」

「……え？」

果たして。お母さんは力が抜けたように座つた。うそ、どうして。お母さんは強くて一生かけても勝てないと思つてゐるのに。お母さんも理解が追いついていないようだつた。

「あら、やっぱり輝夜の魅了の能力は弱いみたいね。死神を座らせる程度なんて」

僕たちが何も喋れないところに一人、狂犬だけがうんうんと納得したように呟いた。

第十九話：私が私を見つめました

事件は、学校からの帰り道で起きた。

事件というのは些か大袈裟かもしれないが、少なくとも僕にとつては大事件だったのだ。

「それでね、お兄ちゃんがね、」

「ねえ、あの子。輝夜にそつくりじゃない？」

遊子の話に割り込むことなんか滅多にしない夏梨が、あそこと指を指す。十字路の向こう側だ。

そこには男と、同世代くらいの少女がいた。男のほうは人に隠れてよく見えないが、少女ははつきり見えた。

背丈は同じくらい。少し垂れた茶色の目は大きく見開かれていて、活発な印象を受ける。他の顔のパーツはほとんど僕そのままで、目を隠したら僕でも判断がつかなさそうだ。また、長い髪を腰あたりで一つにまとめて着物を身につけているからか、道行く人にちらちらと見られていた。

僕が白蛇だつたころと、ほとんど同じ装い。違うといえば、着物が少し薄手で動きやすくなっているくらいだ。

「本当だ。輝夜くんつて目が赤くないとあんな感じなのかな」

「こつちのほうがミステリアスっぽいね」

「服は向こうのほうが珍しいのにね」

驚きで声が出ない僕の代わりに、二人が喋る。こんな偶然つてあるのか？ 同じような服装で、髪で、顔立ちで。

そこで、隣の男の姿が見えた。

「あッ！ ……う、ぐ」

「輝夜!?」

「すごい汗！ 大丈夫!?」

聰明そうなキリリとした目は眼鏡で覆われている。背は高く、細身。服装は袴のようだ。

吐き気がする。過呼吸のせいか視界も霞んで役に立たなくなる。尻が冷たいと思ったら、知らない間にへたりこんでいたようだ。手に

コンクリートの感触がある。大丈夫、と言いたくても口が満足に動いてくれない。

僕はそのまま、意識を失つた。

目が覚めて最初に見えたのは、見覚えのない天井。病院、か？

「おう、起きたか」

首を動かすと一心さんが座っていた。そういえば医者なんだっけ。知ったときは驚いたけど、こうして見るとちゃんと先生なんだとわかる。

「ここに来るまでのこと、覚えてるか？」

「えっと、うん」

段階を踏んで思い出す。学校から帰っていたこと、僕に似た子を見かけたこと、隣にあの男がいたこと。そして、具合が悪くなつたこと。「心因性の過呼吸だろうけど、心当たりはあるか？」

「……うん」

「そうか。……浦原も呼んでるから来るまでもうちょい寝てろ」

心当たりを聞かれたとき、きっと内容も話さなくちゃいけなくなると思ったが。聞かずにそつとしておいてくれるところに優しさが見えた。ありがとう、と小さく呟く。

氣絶した僕を運んでくれたのは、遊子と夏梨だろう。僕のほうが小さいとはいえ、小さな身体で人一人を運ぶのは大変だったはずだ。二人にも感謝しなくては。まったく、黒崎家にはお世話になりっぱなしだ。

「輝夜！」

「お父さん」

ドアが遠慮がちにノックされ、ゆっくりと開けられる。入ってきたのはお父さんで、知らぬ間に強張つていた身体から力が抜けた。

「やつと来たか。んじや帰つていいぞ」

一心さんがベッドから僕を起こしてくれた。ずっと横になつていたから少しふらつくが、問題なく歩けるようだ。

もう一度ありがとうございましたと言つて、本来帰る時間より二時間も遅く家に帰つたのだつた。

第二十話：家族が増えるね？

「……原因を聞いても？」

帰り道では心配したよとしか喋らなかつたお父さんが、家に着くや否や单刀直入に言つた。静かに頷いて了承の意を示す。

一心さんには言いづらかつたが、僕の正体を知つているお父さんが相手だ。なにより、家族に自分が倒れた理由を言うのは当たり前だから。

「街であの人を見かけたんだ」

「あの人……？」

「僕の本当のお父さんだよ」

詳細を話すと、お父さんが目を見開く。

あのとき見たのは、僕の昔の父親。あの人を見間違えるわけがない。なんたつて、僕が白蛇だつたころに一番長く接してきた人で、僕を殺した人だ。

最後に見たときから全然変わつていなかつた。僕の記憶から出てきたと錯覚するほどに。少しくらい髪型を変えるとかしてくれれば、僕もあんなに動搖することはなかつたかもしれないのに。

それに、隣にいたあの子供はなんなんだ。

「輝夜には妹や弟はいるの？」

「いないよ。……聞かされてないだけかもしれないけど」

当時の僕は監禁されていたから、親から伝えられなければ何も知り得なかつた。父親が僕の能力を危惧して兄弟と会わせなかつた可能性も充分にある。あの子は僕の兄弟だと思つたほうがいいな。

しかし、あの背丈。同年代の平均より低い僕と同じくらいだつた。僕が殺される前に産まっていたら今の僕より肉体的には年上になるが、そうなると12歳以上である身長は病気を疑われかねない。ならば、僕が殺された後か同じくらいに産まれたと考えるのが妥当か。

産まれた年は上でも肉体的には下なんてやりにくすぎる。喋ると決まつたわけではないけど、向こうから話しかけられることも考えなければならない。

「これからはボクが送り迎えするよ」

何をしてくるかわからないからね。僕と同じように考えることをしていたらしいお父さんが突然そう言つた。

たしかに、相手からすれば殺したと思った人が目の前に現れたようなものだろう。監禁されていた僕が特殊なだけで、血神でも隣町になら行つても良いのかも知れない。今まで奇跡的に出くわさなかつただけだというほうが自然だ。

また昔のように怯えながら過ごさなければならぬのか。そう考えると今から気が滅入る。次会つたときも同じように失神してしまつたら。刃を向けられてしまつたら。

それだけじゃない。僕は吸血鬼にしては力は弱いけど、目だけで人間を殺せるという話なのに。動搖して力が暴走してしまつたらいうことも考えなければならないのだ。

つい、縋るようにお父さんを見てしまう。

「だあいじょうぶ！ お父さんがついてるんだから」

「……うん、そうだね。ありがとう」

「いーえ！」

お父さんは扇子を広げて満足そうに笑つた。それだけで、身体が少し軽くなつた気がした。失神も暴走も、しないしさせない。僕は覚悟を決めて、その日を終えた。

第二十一話：暴風域突入

あれからきつちり一ヶ月。

僕たちは一度も、彼ら——僕の血の繋がった父親と隣にいた僕に似ている子供——を見かけることはなかつた。毎日の登下校には宣言通りお父さんがついていてくれて、それでちょっとした騒ぎになりもしたけど、特に問題も起きなかつた。

彼らと会わないように道を変えたことが功を奏したのだろうか。兎にも角にも、一安心だ。最初は夜も眠れなかつたが、今はすんなり寝付けるようになつた。

今日帰つたら、お父さんにもういいよと言おう。学校でそう決めて、靴箱からお父さんの姿を探した。

「ほんとに居たんですよ！」

帰り道もあと三分の一になつたくらいのこと。近くで女の子の声がした。振り返る前に、別の声も聞こえることに気づく。

「こら、街中では静かにな。……別に疑つているわけじゃない。世界には似た人が三人いると聞くからね」

初めて聞く声音。だけどこの声質、喋り方は。

「……大丈夫だよ」

息が荒くなつた僕を見てお父さんが察したのだろう、そう呟いて二人の壁になつてくれた。しかしほつとしたのも束の間、相手が僕を見つけてしまう。

「この人です！」

女の子が大声で叫びながら僕のところに駆け寄る。突然のことでも驚きすぎて、近くで見てもそつくりだな、なんて関係ないことしか考えられなかつた。

「やつぱり！ あたしたちすつごく似てると思いませんか？ あたしに兄弟がいたらこんな感じなのかな。一人つ子だから兄弟欲しいんですね、村の子には兄弟もたくさんいるのに！」

「え、えつと」

「でも妹とか弟が産まれたらあたしがたくさん我慢しなくちゃダメな

んですよね。それはちょっと困るかも」

戸惑つてまともに言葉を発せない。横を見ると、お父さんも珍しく圧倒されて口をつぐんでいた。今までこんなに元気な子と接したことはない。クラスにだつていなかつた。

その後も、凄まじいエネルギーを持つ少女は反応が返らなくとも喋り続けていた。

「外の人に話しかけては駄目といつも言つているだろう。すみません、……ッ！」

少女を追いかけてきた男は、僕たちを見て目を見張つた。さつきはお父さんで見えなかつたのだろう。やつと僕に気づいて、口に手をやつて動搖を抑える。

僕も自分を殺そとした男を目の前になると手が震えるが、前回ほどのショックはなかつた。事前に一応の心構えをしていたのが良かったらしい。

「……お久しぶりです」

「……ああ、そうだな」

また会えるなんて思つてなかつたよ。少女の手前そう言うしかないのだろうが、とんでもない皮肉だ。貴方が会えなくしたのだから。少女は『お父様、お知り合いだつたんですか』と一層騒がしくなる。明るくて元気でわがままで、全く僕とはえらい違いだ。そして、お父様と呼んだということは、やはりこの子も血神か。

「ここで話すのもなんだから、村まで着いてくれないか」「アタシ抜きに話を進めるのはやめてもらえますかねえ。現在この子の保護者はアタシなんで」

「貴方は……！ そうか、そういうことか」

村に招かれるとは思わず狼狽える。しかし、お父さんが冷静に間に入つて話を繋げてくれた。相手はお父さんを見て何か気づいたようだけど、自己完結するだけしてこの話を掘り下げる気はないらしい。

「明日は土曜日だ。予定がなければぜひ、うちの村に来てくださいませんか。もちろん、二人で」

「……わかりました。いつかはそちらに伺わなければと思つてたところ

ろつスから」

どうやら、明日村に行くことになつたようだ。お父さんのことは信
用しているが、本当に大丈夫なのだろうか。相手は我が子を手にかけ
る男なのだ。

不安な気持ちが伝わつたらしい。ゆっくり背中をさすってくれる。
ちらと見上げると、お父さんはいつものように微笑んだ。

第二十二話：駄々が有効だと覚えたたらどうするの！

翌日。僕とお父さんは、僕の産まれた村に来ていた。門番らしき人に言われた通り、その場であの人を待つ。

僕が案内できるならそうしていたが、監禁されていたためにこの村の地理がわからないのだ。たとえ知っていたとしても、案内させてくれたとは思えないが。

あの人が僕を警戒しているのは村に入つたときの警備の厚さで容易にわかつた。村がどのくらいの規模かは昨日のうちにお母さんが調べて教えてくれたのだが、いつもは門番など在中させていないしもつと人通りも多いらしい。危険人物が来るからと家から出ないよう言っているのだろう。

そんなことをしなくても危害を加えるつもりはないのに。……いや、少し前まではその気はなくとも力の暴走が害となりえたんだつた。あの人はそれを恐れているんだ。

「ようこそ、ちがみむら知上村へ」

30分ほどして、あの人はやつてきた。なぜか少女を連れて。男は随分疲れているようで、娘を置いて出ようとしたら一緒に行くところられたのかと察する。……親子仲がよろしいようで何よりだ。

知上村とは、この村の名前である。昔は血神村という表記だったが、漢字の印象が良くないという理由で別の漢字が当てられたらしい。

「では中に入つて話しましよう」

案内されたのは、僕がずっと閉じ込められていた神社。つい最近取り戻した記憶がちらつき、身体に少し力が入る。お父さんとこの男も同じようで、僕たちを取り巻く空気が冷たく重くなつた気がする。

「あたし、この人と遊びたい！」

「駄目だ。知らない人と遊んではいけないよ」

空気を破つたのは、少女だつた。小さいお姫様にはじつとしたままなんて我慢できなかつたらしい。もちろんあの人人が許すはずがなく、すぐに却下されて何でどうしてと地団駄を踏んだ。

それでもめげずに少女は主張する。何度もそんなやりとりを繰り返すうちに父親のほうも疲れたようで、結局は折れることになった。あの人も普通の人のように怒つたり笑つたりするんだと驚く。僕は緊張と殺意の入り混じった顔しか見たことがなかつたから、どの表情も新鮮に映る。

「一緒に遊びましょうね！」

後ろで親が疲労困憊の様相を見せていくのには目もくれず、こちらに満面の笑みを向けてくる。似た顔でもこんなに違うのか。

天真爛漫で純真無垢を体現したような少女は、僕の手を引いて神社の中庭へと向かつた。

「私たちはこちらへ参りましようか」

「いいんスか、あの子たちを放つておいて」

「いいんです。私の妻、野兎には効かなかつたそうですから」

完全に輝夜と少女の姿が見えなくなつてから歩き出す。あつさりと娘を遊びに行かせるものだから何か仕掛けてあるのかと思つたが、同族には魅了の能力は効かないと知つていたからだつたとは。

彼が襖の前で足を止めた。入ると中は八畳ほどの和室だつた。奥の障子の向こうは中庭らしく、輝夜たちの話し声が鮮明に聞こえる。なんだ、信用したふうに振る舞つておいて、全然警戒しているじゃないか。これは化かしやいになるかもしねりないな、と得意分野ながら気を引き締めた。

出されたお茶には万一を考えて手を出さずに座る。これからが本番だ。

「千樹郎と申します。……名字はこちらに来る際捨てました」
「アタシは浦原喜助。隣町で駄菓子屋をやつてます」

よろしく、と手を出すと千樹郎も同じように手を差し出した。意外と友好的だと思つたが表情は苦かつた。握つた手が冷たいから、緊張すると顔が強張る癖もあるのかもしれない。なんのために相手が自分たちをこの村に呼んだのかわからないので、観察はいつもより丁寧にしておく。

千樹郎はしばらく何から話せばいいか決めあぐねた様子で視線を

宙に浮かせていたが、ついに決まったのかこちらを真っ直ぐに見つめて口を開いた。

「もうご存知でしょうけど、私は死神でした。……だから知っています、吸血鬼『狂犬』のことも」

第二十三話：筋肉痛不可避

「ねえ、遊ぶつて言つても何するの？」

一面芝生の庭に来たが、遊べるものはどうにも見えない。こんなことならゲームでも持つてくれれば良かつた。どう見ても田舎だし、この子にゲームを見せたら未来人扱いされそうだ。

「これです！」

にこにこしながら手にしたのは、その辺のボール。嘘でしょ、外で遊ぶなんていつぶりだよ。吸血鬼だからか、日光を浴びると少し具合が悪くなるのだ。だから僕は小学校の体育くらいでしか外にいない。そういえば、彼女の持っているのは小学校で見るボールじゃない。和風の柄のような。も、もしかして……鞠^{まり}？

「鞠つくのが好きなんです」

鞠だつた。

「まあいいけど……。ええと、あれ？ 名前聞いてなかつたよね」

「そうでした！」

そう言つて口に手を当てる。全ての動作が大きくて、見ているぶんには飽きないけどやつて疲れないのかな。

「僕は浦原輝夜。君は？」

「あたしは32代目血神『川瀬』って言います！」

川瀬、かわうそ。可愛くて元気なこの子にぴつたりだ。

しかし、僕の存在が書類上で無かつたことにされている可能性も考えていたが、32代目ということはちゃんと僕も数えられていたのか。川瀬は僕のことを知らないようだつたけど、歴代血神に興味がないと先代なんか知らないだろうし。

「輝夜さん、あたしにそつくりですよね！」

「そうだね。目元はちょっと違うけど」

「はい！ お母様に似てるんです」

ああ、誰かに似ていると思つたら野兎に似ているんだ。あの人の

おつとりした雰囲気とは全然違うから気づかなかつた。

「野兎さんは元氣にしてる？」

「えっと、最近はちよつと具合が悪いみたいで……でも大丈夫って言つてました！」

「そうなんだ。あの、昔から病気がちだつたからどうなのかなと思つてたけど……そこまで悪くなさそうでよかつた」

僕の覚えてる限り、野兎は元気なときのほうが少ないほど身体が悪いらしかつた。既に亡くなつているかも知れなかつたが、ちよつと具合が悪い程度なら安心だ。

「あれ？ なんで輝夜さんがお母様のことを知つてるんですか!?」

「僕も昔血神だつたんだよ。31代目血神『白蛇』って名前でね」

「そりだつたんですか！ てことは、あたしのお兄様!?」

「そり、なるかな？ 色々あつて違う名前になつたけど」

「そりなんだ！ と目をキラキラさせてこちらを見る。氣恥ずかしいというか、申し訳ないというか。本当に兄弟ができるなんてと喜んでいるところに『僕は昔君のお父さんに殺されかけたんだよ』とは言えず、色々、と濁さざるを得なかつた。

「じゃあ、お兄様つて呼んでいいですか？」

「いいよ。妹だもんね」

僕の妹。ふふ、妹か。うちにも年下はいるけど、ジン太は弟というよりは近所の生意氣なガキのイメージだから、なんというか新鮮だ。

「ねえ、川瀬つて今何歳なの？」

「あたしですか？」

背丈は変わらないから一個下かな。そう思つて見つけると、川瀬が右手をぱーに、左手をちょきにした。薬指まで伸ばしているから、厳密にはちょきではないが。

この村の流行りのポーズなのか？ それともじやんけんがしたいという合図？

「ふた月前に、8歳になりました！」

第二十四話：妹との遊びはほぼ育児

「お兄様弱い！」

「か、川瀬が強すぎるんだって！」

あれから十数分。鞠でどう遊ぶのかも知らない僕はなんとか見よう見まねで川瀬と遊んでいた。川瀬はびんびんしているというのに、僕は体力が無さすぎてとうとうしやがみこんでしまつた。目の前で飛び跳ねられるのを見るだけでも疲れる。

「どうか、君は着物着て動きもかなり制限されるはずでしょ!? なんでそんなに動き回れるんだ。」

「ごめん、ほんと待つて、少し休もう……」

「えー……はーい」

座り込んでいる僕の隣に川瀬も腰掛けた。川瀬の着物の裾は開いてるし土も飛んでいる。どうやつたらそうなるのかわからないが、髪の毛にまで芝が引っかかっていたのにも本人は全く気づかない。

女の子でしょ、と言いながら取つてやると、川瀬はあどけなく笑つた。ちょっとお小言でもしようと思つていたのにそんなふうに笑われると、全身の力が抜けて何も言えなくなる。あの人も、こんな気持ちなのだろうか。

「あたしも、お兄様みたいに普通の名前がほしいです」

「普通の？」

「はい。他の子は寛太とか由紀子とか、川瀬とはなんとなく違う名前ばかりなんです」

村の子供と遊ぶことが多いと他の子と自分との違いがわかりやすい。僕にはなかつた経験だが、多感な年頃だ。『名前変だね』と言われたこともあるのだろう。

「じゃあ、僕がつけてあげようか？ ちゃんとしたところでは使えないけど」

「いいんですか？ 嬉しい！」

さつきまでも散々暴れたのに、喜びを身体中で表そうとしてまたぐるぐる回る。そんなに喜んでくれると僕も嬉しいけど……。何も考

えてなかつたから罪悪感がすごい。

何が良いだろうか。川瀬だから海……いや川か。それよりも、明るくて元気だから太陽とか。太陽……？

「春陽はどう？ 春の太陽って書いて、春陽。春生まれで元気な君にぴつたりだと思うよ」

「春陽！ はるひ、はるひ、はるひ……すつゞくいいと思います!!」「気に入ってくれてよか、おわあ!?」

何度も口に出して響きを確認しているのを見て僕まで頬が緩んでいたら、急に抱きつかれた。衝撃を受け止めきれずに倒れ込む。

「あたし、これからは春陽つて名乗ります！」

川瀬——春陽はすぐに起き上がって名前を言う練習を始める。しかし、すぐにその輝く目を曇らせた。

「みよ、名字がありません！ どうしよう」「たしかに……」

そういえば血神には名字がないんだつた。正式には知上というのが名字に当たるらしいが、それをそのままつけるのは躊躇われる。だからといって浦原姓にするのもおかしいし……。

「あ、あの人と同じ名字にしたら？」

「お父様ですね！ なるほど、それは良いんですね」

僕はあの人の下の名前すら知らないけど、仲の良い春陽なら知っているだろう。

「ではお父様の話が終わるまでまた鞠で遊びましょう！」

「え、なんで？」

「あたし、お父様の名字を知らないので！」
知らないのかよ！

しかたない。妹のわがままを聞くのも兄の役目だと自分に言い聞かせ、僕はまた立ち上がるのだつた。

第二十五話：バトルはバトルでもレスバトル

吸血鬼『狂犬』とは、恐れられている吸血鬼の中でも特に力が強いとされている個体です。

回復能力や具現化の力など全体的に他の吸血鬼よりも高い能力を持つていますが、特筆すべきは全てを思い通りにできる力でしょう。触れずに殺したい相手だけを殺すこの力によって、多くの死神が犠牲になりました。推定ではその数百五十人とも言われています。

狂犬は現在、技術開発局にて厳重に保管されています。

何百年も前の真央靈術院の教科書には、吸血鬼についての記述が載っていた。朽木ルキアは知らないようだつたから今は教えていないうらしいが。

狂犬は唯一一名前まで教科書に載っていた吸血鬼だつた。いかに残虐で残酷な存在かを知らしめるために。

実際の彼女が人間と共存していたと知らない者は、教科書で綴られていた極悪非道な化け物として認識しているだろう。

「戸魂界で謀反でもしようとしているんですか、あの化け物を連れて」「あの子は化け物なんかじゃないつスよ。貴方の子でしょう」

千樹郎は、何の躊躇いもなく輝夜を『化け物』と言つた。吸血鬼の末裔であることは確かだが、曲がりなりにも自分の血を継いだ子供だというのに。輝夜の親として怒るより前に、千樹郎の異常さに気持ち悪くなる。

「違いますよ。貴方も見たでしょう、あれは狂犬です。私の息子の身体を依代にして蘇った、化け物だ」

ああ、この人は。輝夜が白蛇として産まれたときからずっと、狂犬だと思つて生きてきたというのか。人間を殺し、死神を殺し、同族すら殺せるという噂の正真正銘の万物の王だと。命を脅かすとされる存在だと思つて10年も。ずっと赤目の魅了を受けながら、殺す機会を伺つて？

「だから殺したんです。このままでは世界が滅びる。なのに、生きていたなんて……」

「……あの子は狂犬じやありませんよ」

そう思つて生きていたなら、輝夜を殺そととしたのもわかる。しかし、あの子は狂犬とは違う。

それに、恐れられている狂犬だつて実際は、人間と共に存するためには己の血を与えていたのだ。自分も当時直接会つたことはないが、噂のほとんどが嘘や誇張だということはわかる。

「刀はどう説明するんスか。刀の状態の狂犬サンと喋つたつて聞きましたよ」

「きっと基本は白蛇本来の性格なんです。刀に封印されていた奴がそれを乗つ取つて姿かたちまで自分そつくりにして、許せない」

「いい加減にしてください！　あの子に、同族すら視線ひとつで殺せるあの力はない」

「でも、あの赤い目は……」

何を言つても千樹郎は頑なに認めない。証拠もないのにあの10年間を否定することを信じろと言つているのだから、無理もないか。だけど、ここで眞実を知つてもらわなければ、ここに来た意味がなくなる。

「見てください、本当のあの子を」

ボクは、二人の影が映る障子を開け払つた。

そこに見えるのは、ぐつたりした輝夜とまだまだ元気そうな少女。手には鞠を握つていて、それで遊んでいたことがわかる。

「ぜー、はー……うう、もう無理だつて」

「ええー！　やです、もつと遊びましようよう」

無理と言いながらも、少女が日向に連れて行くと『じやあもう一回だけね』と鞠をつき始めた。その姿は、見た目を除いても仲の良い兄妹のようだ。

「こんなになるまで遊んであげる優しい子が、人を殺すなんてできませんよ」

さつきまで苦しそうに眉根を寄せていた千樹郎は、その光景を見て初めて憑き物が落ちたように目を見開く。自分が我が子を手にかけなければあつたかもしれない未来に想いを馳せているのだろうか。

「ああ、私は実の息子になんてことを……。白蛇、すまなかつた。本当にすまなかつた……」

「あの子、今は浦原輝夜つていうんスよ」

「そうか……いい名前だ。輝夜、輝夜か」

名前を囁み締めるように数回呟いて、初めて頬を綻ばせて笑った。その目には涙が溜まっており、目を細めたのを合図にこぼれ落ちる。それからしばらく、千樹郎は輝夜から目を離さずに涙を流し続けた。まるで、あの10年間で凍つた気持ちを解かすように。

第二十六話：おーい！

「あ、お父様！　おーい！」

「そんなところにいたんだ。全然気づかなかつた」

ひとしきり鞠で遊んで何度目かの休憩をしていると、突然春陽が手を振った。その先にはある人とお父さんが話しているのが見える。どこに行つたのかと思っていたが、こんなに近くだつたなんて。

向こうもこちらに気づいたようで手を挙げたり扇子を扇いだりと何らかの反応を示す。わかる前はもう少し殺伐とした雰囲気を纏っていた気がするけど、今は二人とも穏やかな表情をしている。「どうだつた？　輝夜くんと遊んだんだろう？」

「はい！　すつゞく楽しかつたです」

名前もつけてもらつちゃいました！　とまたびよんびよん飛び跳ねながら報告する。

あれ。さつきこの人、僕のことを輝夜くんと呼ばなかつた？　驚きと戸惑いでお父さんを見上げたが、いつもより楽しそうににこにこするだけだつた。

しかも、大切な娘に勝手に名前つけて怒られると思つたのに良かつたなどしか言わない。さつきまで娘の前でも僕への警戒心を隠してなかつたはずだ。憑き物が落ちたようなすつきりした顔をしているし、お父さんとの話し合いで何かあつたのだろうか。

「輝夜くん」

「は、はい」

彼は少し真面目な顔をして僕を呼ぶ。それがあの日のようで少し身体が強ばる。恐る恐るといつたふうに近づく僕をお父さんが笑つた。

「すまなかつた」

「え、いや……あのときは僕もこの目の力が暴走してたみたいなので」「本当に、すまなかつた」

頭を深く下げる姿に焦つてやめてくださいと言つ。あんなに恐ろしかつた父が、今は小さく見えた。

ようやく顔を上げたその表情にはもうあの日の狂気はなくて、僕はやつとこの人と親子になつた気がした。

「ええ！ もう帰っちゃうんですか!?」

「ごめんね。また遊びに来るから」

そろそろ日も落ちようという時間、僕とお父さんは知上村の入り口まで見送りに来た二人と挨拶していた。ごねる春陽をあの人があなだめすかす。僕もなんとかフォローしたら、ほんとですか！ とそれは元気にお返事された。

「好きなときに遊びに来ていいからね、輝夜くん」

「お父様……。わかりました」

「あー!! 輝夜のパパはこっちつスよ！」

久しぶりに呼んだ『お父様』に目敏く反応したお父さんがかなりの勢いで抱きついてくる。く、苦しい、と引き剥がそうとする僕を見て彼はひと笑いした。

「千樹郎でいい」

「え、」

「私の名前だ」

まさか、20年教えてもらえなかつた実の父親の名前を今教えるもらえるなんて。名前は呪いとよく聞くというのに、呼んでもいいと言うのか。

「千樹郎、さん」

「ああ」

震える口でなんとか名前を紡ぐと、彼は幸せそうに笑つた。お父さんも満足げに頭をかき混ぜたが、強めの力加減だつたため丁重にやめていただいた。

「では、さようならつスね」

「お、お邪魔しました！」

春陽がばいばーいと手を大きく振るのにつられて控えめに手を上げた。飛んで喜んでいる姿を見てこちらも頬が緩む。

「ああ、そうだ。浦原さん」

「ハイ？」

「思い出したんです、名字」

「僕はかつて、浮竹千樹郎と呼ばれてました」

もし兄に会う機会があれば、元気にやつていると言つてやつてください。千樹郎さんはぽかんとした顔をする父に、いたずらが成功したように笑う。お父さんはとすると、すぐ理解したのか帽子を抑えてクツクツと喉を鳴らした。

意味のわからない父親二人に、子供二人は首を傾げる。どうせ僕たちが頭を使つてもわからないままだから何も聞かないけど。こうして、長くて短い帰郷は幕を閉じた。

おまけ

「昔は輝夜もあんな着物着てたの？」

「うん。突然どうしたの？」

帰りの道のりで、急にお父さんが話題を変えた。さつきまで今日の晩ごはんの話をしていたのに。

「いやあ、さぞ可愛かつたろうな、と」

「……あんまり可愛いって言わないでくれる？」

「ええ!? なんで」

「世界一可愛いとか言われると、本当にそうなんじゃないかと思つちやうでしょ」

「正しいじゃないっスか！」

「いや……そろそろナルシストになりそうで」

「ナルシストな輝夜も可愛いから大丈夫！」

また抱きしめられ、ぐえと潰れた声を出す。全く、こちらにとつては死活問題なんだが。

つい先日も、同級生から『可愛いって言われて喜ぶなんて変だぞ』と言わされたばかりで。……まあ、可愛いは褒め言葉として使われてるんだから喜ぶのは喜ぶんだけど。

ちなみに、晩ごはんは唐揚げだった。わーいと春陽に影響されて大袈裟に喜ぶと、『お疲れでしようから皆さん的好きな唐揚げにしました』と言われた。テツサイさんは気遣いの鬼なのだ。

第二十七話：セーの、ハンサムエロ店主ー！

「なあ輝夜、あのうさんくさ下駄帽子と一緒に暮らしてて本当に大丈夫か？」

「なんですか突然。ついに職質三桁の大台に乗つたとか？」

二桁もされてんのかよ。と引き気味で自身の身体を抱くように腕を巻きつけたこの人は、黒崎一護。僕の同級生であり友達の遊子と夏梨のお兄さんだ。人間ながら死神のお仕事もしているらしく、死神相手に商売しているお父さんのお得意様もある。

いつものように朽木さんとうちに買い物しに来た帰り、僕を見つけた一護さんが冒頭のようなことを言つたのだ。

うさんくさ下駄帽子とはもちろん僕のお父さん、浦原喜助のこと。大変怪しい雰囲気を纏つてはいるが、すぐ抱きつくのと研究のために何徹もする以外は困つたところなど特にないのだけど。やばいのはむしろお母さんのほうだ。

何があつたのかと話を聞こうにも、一護さんは言いにくそうにもごもごするだけだつた。耳を澄ますと、実の息子にこんなこと言つていののか？ などと呟いているのが聞き取れた。……本当に何をしてかしたんだ！？

「あー、いや……。この前浦原さんが自分のことを『ハンサムエロ店主』って言つててよ。雨とかお前とか、危なくねえかなって」

「ハンサムエロ店主」

僕は頭を抱えた。どうやつたら高校生相手にそんな自称を披露する機会があるというのか。ハンサムエロ店主つて？ セクハラから流れでしか言えないでしょ。

というか、目の前で人の姿になつたお母さんになんの反応もしないお父さんしか見たことなかつたじゃん！ エロ本をあげても困った顔でお母さんやテツサイさんに助けを求めていたものだから、むつりなんだとばかり思つていた。ハンサムエロ店主ならエロ本もらえるとわかつた瞬間喜びを表現した舞を踊つても良いくらいなのに。流石にそれはしないと思うけど。あと、エロ本をもらつて踊るお父さ

んを純粋に見たくない。

「まあ、大丈夫そならいんだ。悪いな、変なこと言つて」「変なこと言つたのはお父さんだから気にしないでください！　すみませんでした」

じやあなた爽やかに手を振る一護さんを見送り、ため息を一つ。……高校生に迷惑どころか心配されるようなことをするなよ、何百歳。

「黒崎サンと何話してたの？」

「あ、ハンサムエロ店主」

「え？」

一旦部屋に行つてまた居間に戻ると、お父さんがいた。うつかりさつき聞いた謎の肩書きで呼んだ気がしたが、気のせいだろう。お父さんが聞こえるはずのないものを聞いたときのように目をぱちくりさせている。何があつたんだ。

「な、なんで輝夜がそれを……？」

なぜか生まれて初めて見るレベルで動搖している。それってなんのことだろう。

「そんなことより、はい！」

「ええ、何かくれるの!?　ありがとう一生大事に」

するね、とは続かなかつた。理解の追いつかない表情で僕と包装のほとんど剥がれかかつたそれを交互に見つめる。

「あれ、気に入らなかつた？　この前リサさんにもらつた『つゆだく爆乳学園』教師も生徒も——」

「よ、読まなくていいから！」

顔を赤だか青だかに忙しなく染めるお父さんが半ば叫ぶように言つて口を塞ぐ。ハンサムエロ店主ともあろうお方が、まさか恥ずかしがつてているというのか。

「ごめん、こっちのほうが良かつたか。ええと、『電車に乗つたが運の尽き』初めてイタダキマス』

「悪かつた、ボクが悪かつたからもうやめて！」

手で顔を覆つたのを見て、流石に可哀想になつてきた。息子のAV

タイトル音読はいろんな意味で刺激が強すぎたらしい。ぐつたりと床に突っ伏して動かなくなつたお父さんに喋りかける。

「もう変なセクハラ発言しない?」

「しない……」

「高校生に迷惑かけない?」

「かけない……」

うん、わかつた。意地悪してごめんね。そう言つて頭を撫でてあげた。

それから、AVは僕に渡した本人に突き返し、お父さんは変な肩書きを名乗ることをやめたのだった。その後しばらくお父さんの一護さんへの当たりが強くなつたのは、また別のお話。

第二十八話・さようなら、狂犬（語弊）

雨続きのある日、扇子の形になつてゐる狂犬がおもむろに呴いた。

「うーん、なんだか落ち着かないのよね」

喉に小骨が刺さつたような不快感が声色から伝わつてくる。ほんの少しの違和感も、ちりも積もればなんとやららしい。

表情がわからない狂犬だが、もとより感情表現がオーバー気味だったのだろう。声のトーンや間の取り方で細かいニュアンスもばつちりこちらに伝達される。

「いつから？」

「そうね……」

去年の今頃はそうでもなかつたから、としばらく悩んで、とうとう顔を上げた。よう聞こえた。

「刀じゃなくなつてからよ！ やつぱり何百年もあの姿だつたから、あれが一番落ち着くのね」

「そういうもののなの……？」

まあ、そういうことならお父さんに直してもらおう。持ち運びが楽だからと扇子の形にしてもらつたのは僕だから、少し罪悪感もある。……しかし直せるのだろうか。

直せるにしてもそうでないにしても、僕が考へてもわからないことだ。とにかくお父さんに相談してみよう。そう決めて扇子片手にお父さんの部屋をノックした。

「できますよン」

「あら、じゃあお願ひ
できるんだ……。」

にここにことマイ扇子で口を隠して笑うお父さんに狂犬を手渡す。そもそも刀が残つていたことが驚きだ。てつきり木つ端微塵に碎いて狂犬の血を取り除いたものだと思つていたんだけど。

明日には元通りの狂犬サンをお渡ししますね、とピースしながら自室に消えていった。

刀に戻つたらこつそり学校に持つて行くことができなくなるのか。

いつも鞄に入れていたからなんとなく心細く感じるが持っていないと死んでしまうほどではないし、そのくらいは我慢しよう。お気に入りのぬいぐるみを手放せない幼児でもあるまい。

そういうわけで、今日は久々に狂犬のいない部屋で一人眠るのであつた。

「ねえ、貴方

「なんスか？」

「何か隠しているでしょう」

ほう、とわざとらしくとぼけてみる。別に隠しているわけでもないのだけど、この扇子は勘がいいらしい。流石は死神の間で最も恐られた吸血鬼だ。なんて、恐れられる本人（本鬼か？）も知らない事実無根の話もあるだろうが。

「ああ、嘘です嘘です言いますよ」

「ふん、もつたいぶらないで早く言いなさいよね」

下手な口笛を吹いていると無言になつた扇子から大量の殺氣を感じ、慌てて手近な机に置く。気取ったお嬢様のような口調だが、案外気が短いのだ。700歳は超えていると聞いたのは気のせいだったかもしれない。

「何から話しましょうかね。……じゃあ、あの刀」

何百年も貴方の身体だったそれですが。

「それ、どこで手に入れました？」

第二十九話：年上つぼい女に年齢は聞くな

たっぷり十秒ためて、彼女が発したのは声ではなく息だつた。ふん、と、鼻を鳴らしたのだ。ばつが悪そうに、言いづらそうに。

「死神から……もらつたわ」

奪つたの間違いでは？ 喉ぎりぎりまで出かかつて、なんとか押し留めた。ここで彼女の機嫌を害するわけにはいかない。今は何もできないとはいえた存在そのものがイレギュラーなのだ。何をされるかわからない現状、怒らせないのが得策だろう。

「死神が私を襲つたのは、一度や一度ではないのよ」

曰く、最初は学生らしき水色の袴を身につけた若者すらいたらしい。二回目からは比較的実力のある者ばかりが来るようになつたが、それもまたあつけなく散り、そしてようやく、ある日弱点を突く形で死神たちに倒されたのだと。

「あの刀は、最初に来た若い男の持ち物だつた。……はずよ」

「はずつて……」

「うるさいわね。何世紀も前の話なのよ？ 似たようなこともたくさん起きたのに、覚えているほうがおかしいでしょ」

なんとも老人くさくて疑わしいが、刀の出どころについては予想通りなのでおおかた確定だろう。

しかし、こちらが珍しく真面目に話そうとしているのに定期的にボケてくるのはなんなんだ。無自覚なのだろうが、うつかりこちらがツツコんでしまいそうになるからやめてほしい。ツツコんだらツツコんだで気分を悪くしてやりづらくなるんだから困つたものだ。

「それで？ 死神が持つてるのは特別だつたりするのかしら。刀に姿を変えた私を見る目がいやらしかつたもの、そのくらいの理由がないと許さないわよ」

「いやらしいって……。まあ、そういうところっス。死神は皆、斬魄刀という刀で虚と戦つてるんスよ。所持者の心に呼応して、魂が宿るんです。そして、いろいろな姿に形を変えて主人を守り助ける」

ふうん、とわかつたのかわかつてないのか判断しづらい反応が返つ

てくる。さしづめ、早く本題に入りなさいというところだろうか。

「狂犬サンが手に入れたのは、いわば斬魄刀の子供である浅打つス」

浅打。まだ形の定まつてないただの刀だ。斬魄刀は持ち主が死んだら勝手に壊れてしまうが、浅打はその限りではない。

戦うことの多かつた彼女にとつて目の前に落ちている武器を拾わない手はなかつたはずだ。そのころすでにいたかどうかわからないうが、彼女には子供という守るべきものがあつたのだから。

「その、浅打とかいう魂の入つていらない空っぽの器に私が入つた、と？」

「はい。とは言つても、そのあたりはまだ断定できていませんが」

「そうね。同族が血液だけになつても生きたという話は聞かないし、一理あるように聞こえるわ」

聞こえる、とはどういう意味だ。含みのある、本当はそうではないかのような言い方。この鬼は何を知つてゐる？ 何を隠してゐる？ 「違うのよ。何も知らないし、何も隠してなんてない。ただ、貴方勘違いしてるんじゃない？」 そして、それが原因で矛盾が生じてゐる「私、700年も生きてないの。せいぜい200年程度よ」

第三十話：鬼に金棒：強い者が強い物を持つ例え

「私が起きたのは、つい最近。目が覚めたら身体は刀になつてゐるし500年も経つてゐるしで驚いたわ」

「最近つて、」

「ええ。——20年ほど前のことよ」

ずっと、彼女は刀に血を吸わせてから今まで途切れず狂犬としてあり続けたのだと思っていた。しかし実際は、500年間意識のないただの刀だつた、と？

そうなると話は変わつてくる。20年前。およそ輝夜が産まれたころだ。死神を父親に持ち、今はほとんど人間ではあるものの吸血鬼の血を引く者を母親に持つ、輝夜が。

あの子の誕生によつて狂犬が目覚めたということは、つまり。

「浅打が輝夜に影響を受けて力を持つた……？」

「……私は、そう考えているわ。私だつて最近までこの血だけで動いていたと思つていたけれど、そんなのありえないもの」

つまりは、浅打が輝夜の斬魄刀になつた。それが本当だつたなら、大変なことになる。最強と言われる吸血鬼の血を引いた半不死身の輝夜が、どんな能力かもわからぬ斬魄刀を持つだつて？

それだけでも危険で大問題と言えるが、問題はまだある。

自分や夜一サンが近くにいるから、あるいは吸血鬼の血が限界まで薄まつてゐるから氣付かれなかつた輝夜の存在が、斬魄刀によつて明るみに出る可能性が高くなるのだ。死神に見つかつたら即座に捕まつてしまふ。そんな事態になつたらもちろん全力で阻止するつもりではあるが、護廷十三隊が総力を挙げて向かつてくると考えられる。一人二人ならまだしも、片手どころではない隊長格を相手にしては流石に守りきれない。

「刀をぶつ壊したらなんとかならないかしら」

「アタシも思いましたけど、狂犬サンがどうなるかわかりませんよ」

「いいわよ。本来死ぬはずだつた私となんの罪もないあの子、どちらを取るのが賢明かなんて火を見るよりも明らかでしょ」

「……まあ、持ち主が生きていたら斬魄刀がどうなろうと元に戻っちゃうんスけどね」

「早く言いなさいよ」

怒られた。

それはさておき。兎にも角にも、斬魄刀をなんとかしなければならない。話している間に知り合いのほとんどに連絡したので、本格的な話し合いは彼らが集まつてからになりそうだ。

と、そこでノックの音が聞こえた。

「はいはい、ちょっと待ってくださいね」

靈圧からして輝夜だつたために、一旦思考をストップしてドアを開ける。聞かれていなかつたかだけが気がかりだつたが、大人しく扉の前で待つていた輝夜の表情が重くなかつたのを見てひとまずほつとした。

「どうしたの？　あ、まさか一人で寝られなくて……」

「違うんだ。ちょっとお願ひがあつて」

珍しくマジレスされてしまつた。いつもは元気にツツコんでくれる輝夜だが、こちらのほうがダメージが大きいのをわかつてのマジレスだらうか。すっかり大人になつてしまつたようで少し寂しくなるからやめてほしいのだが。

……お願い？　ショックで脳の処理が遅れてしまつた。あの輝夜がお願ひを？　それも目を合わせて可愛くおねだりなんて。なんでも聞いてあげちゃうが、どんな無理難題を吹つかけようとしているんだ。

「あのね、それが欲しいの」

「ああこれ？　はい、どうぞ」

「ありがとう。じゃあね」

指された先のものを取つて渡すと、満足そうに笑つて部屋を出ていった。それにしても、夜にわざわざ取りに来るとは。なにかの宿題に使うのか？

「馬鹿！」

「え？」

手に持ったままの扇子が突然怒り始めた。いや、怒るなどという甘いものではない。正しく『怒鳴る』だ。意味がわからずきよどんしていると、彼女は一つため息をついた。

「何をしたかわかつてないの？　さつき渡したのは何か言つてみなさい」

「それは、そこにあつた刀でしょう？　貴方の身体だつた」

あれ？

それって、さつきまで危険だなんだと言つていた斬魄刀では？　なんで疑問も持たずに、それも一番渡してはいけない持ち主に渡してしまつたのだろう。まるで身体が勝手にそうしたような。

身体が勝手に。

そんなの、一つしかないじゃないか。

「魅了、ね。全く、厄介なことになつたわね」

「はい。……すみません。アタシが気を抜かなければこんなことにはならなかつたのに」

「過ぎたことを言つてもどうにもならないわ」

とにかく追いましょう。そう言われて初めて、輝夜が家の外に出たことに気付いた。早くしないと本当に取り返しがつかなくなる。急いで再び連絡し、家を飛び出した。

第三十一話：見た目は輝夜、頭脳は他人。その名は

輝夜は案外すぐに見つかった。家から程近い空き地でぼうつと佇んでいるのを、夜一サンが見つけていたのだ。輝夜に目立った外傷はなく、周りの建物にも被害は見受けられなかつたためにひとまず胸を撫で下ろす。しかし、明るい月の光に照らされたその姿はどことなく正常ではないように見える。なんにしても、早くなんとかしなければ。

「おいおい、こりやどないなつとるんや……」

自分たちが到着して間もなく、平子サン、ひよ里サン、そしてテツサイが順に駆けつけた。

平子サンが空を見上げて独り言のように呆然と呟く。なにせ、一つも雲がないのだ。ついさっきまで雨が降っていたのに。もう三日は太陽も月も見ていない。今朝の天気予報ではさらに三日三晩雨続きだろうとまで言われていた。

現在自分たちを煌々と照らす月は、本来見えるはずのないものなのだ。

輝夜の、あるいはその斬魄刀の仕業だと思つて良いだろう。天候を操る能力か、風を操る能力か。雲も水であるから、水を操れるかもしれない。

「なんだ、もう来たの」

つまんない。そう言つて振り向いた輝夜は、右手に持つた刀を軽く振つてくつくつと笑つた。

「あれは輝夜じやないわ」

「でしようね。たぶん、斬魄刀に同調している」

同調とは、斬魄刀を扱い慣れてない死神が刀に近付いてしまうことだ。自分が尸魂界にいたころにもこの事例は良く聞いたが、斬魄刀の性格によつては事件に発展することもあり危険である。それも、始解の能力がわからないから特に、だ。

「どうするんじや、喜助」

「そうつスね……。氣絶させて拘束、が一番良い案だとは思うんスけ

ど、それができるかどうかってとこスかね」

相手の手の内がわからないとどうとも言えない、が本音だ。ほどんど不死身のために弱い技では死なないとは思うが、下手に攻撃して倍返しされないとも限らない。

「とにかく、今は様子見やな。被害が出そうになれば防ぐつちゅーことで」

「ハア!? どう考へてもさつさとなんとかすべきやう!」

「ひ、ひよ里サン、相手は吸血鬼ですよ!? 純血でこそないですが先祖返りで——」

「うるさい！ ウチは行くで」

一発殴つて連れて帰る！ そう言い切つたひよ里サンは輝夜のもとに走つていつた。輝夜はそれを一瞥して、それから彼女を吹き飛ばした。小さい身体はなんの抵抗もなく簡単に飛んでいき、テツサイの放つた縛道『吊星』でようやく止まつた。

飛ばしたとなると、やはり風を操れると考へていいのだろうか。ひよ里サンは無事だったが、鬼道で助けなければ建物にぶつかつて大怪我になるかもしれない。警戒して然るべきだろう。

思考を一旦整理して新たに対策を考えていると、輝夜であつてそうでない彼が『あのさあ』とこちらに呼びかけた。

「どんな能力か気になるなら普通に聞けば良いじやん。なんで聞かないの？」

「教えてくれるんスか？」

「んー、気分による。今はいいよ」

彼は間延びした喋り方をして首を傾げた。頭が重いかのように。

合わせて動いた刀身が月光に反射してきらりと輝く。

「僕は『月夜鳥』。明るい月が好きなただの鳥だよ」

名乗りながらおもむろに手を擧げる。そして、空に浮かんだ月を指差した。逆光になつて見づらいが、その指先には赤い何かが付いているように見える。

「——これ以外はね」

パン。破裂音が聞こえると同時に強風が襲う。これは……爆発

!?

目を開けることも叶わない状況で、なんとか輝夜の靈圧を確認する。場所は動いていない。己の能力を煙幕や閃光弾のようにして逃げるつもりかと思つたのだが。

「別に君たちに酷いことしようなんて思つてないよ。いい加減雨にも嫌気がさしたから晴らしたかつただけさ」

あ、でも。閃いたように手を叩いた彼は、脚を浦原商店とは反対に向けて足踏みした。そしてこちらを振り返る。

「やつと解放してもらえたんだ。僕だつて遊んでもいいと思わない？」

「遊ぶ……？」

「うん。だからさ——僕と君たちとで、鬼ごっこしようよ」

第三十二話：ようい、どん

「儂が出よう」

「いいねえ、早そう。楽しそうだ」

夜一サンが一步前に出る。表情は好戦的な笑みを浮かべていて、自分の息子相手にも負けるつもりは毛頭ないようだ。なんとも大人気ない。

「制限時間は5分。それまでに君が僕を捕まえられたら君の勝ち、できなければ僕の勝ち。これでいいでしょ」

「儂が勝つたら、精神の主導権を輝夜に渡してもらえるんじゃない」「いいよ。ま、できたらの話だけどね」

「ほう……？」あとで泣くなよ小僧」

完全に向こうのペースに乗せられている。瞬神の名は伊達じやない、普通にやつたら誰にも負けるはずはないのだが、こうしてカツとなつてしまふとわからないのだ。手元にある短気仲間の狂犬サンもその乗せられやすさに流石に引いている。

そうこうしている間にも、月夜烏は鬼ごつこの準備を進めている。とは言つても靴紐を結び直すとか屈伸するとか、大層なことをしているわけではないが。

「それじゃあ——」

「ようい、どん。彼はその気の抜けた声で言った。

こちらが10秒待つ前に、月夜烏は盛大に砂煙をたてる。数秒で煙は消えるが、すでにそこに彼の姿はなかつた。

しかし手がかりがなくなつたのではない。相手は靈圧を隠そっとしていいないので。隠し方を知らないのかわざとか。どちらにしても、自分の信条は有利な手はなんだつて使う、だ。

それは夜一サンも同じだろう。全神経を集中させて靈圧のある場所を詳細まで探索している。

「じゅう」

そして、カウントを終えた瞬間に一時の方向に飛んだ。

舐めた口をきくあの小僧を絶対に捕まえなければならない。儂の

脳内はそれに埋め尽くされていた。やつは儂を揶揄うように靈圧をそのままにしていて、それがまた儂の神經を逆撫でさせた。

あんなに軽口を叩いていたわりに、思ったよりも早く姿が見えてくる。雑魚が。

「5分もいらないようじやな……ッ！」

こちらに気づいてない様子の後ろ姿に近づいて肩を叩こうとしたが、直前に能力を使つたのだろう。衝撃のうちに儂はさつきよりも後ろに、やつはうんと前にいた。

それから、近くに来てもすぐに離されるのを何度も繰り返した頃。我々に残された時間はあと2分を切っていた。能力の制御もさることながら、反応速度が半端ではないのだ。これでは埒があかない、もつと頭を使わなければ。ようやく頭の血が若干降りてきて、作戦を立てねばと思い立つた。

しかし、まだ頭に血が行き渡らない状態で立てた作戦など紙屑のようなもの。行き止まりに追い込んで袋の鼠にしようとしても上に逃げられ、回り込んで正面から突進しても下に逃げられ、失敗ばかりだ。もう1分しか残つていないのである。

やつの厄介なところは、靈圧を固めた足場を用意せずとも爆発をうまく利用して空中に逃げられるところ。……ということは、前と左右に上下を足した五面を塞ぐ何かがあるか、はたまた地上のみで戦わなければならなくなるか、どちらかさえクリアできれば勝てるということである、のか？

それなら打つ手はある。さつきまで忘れていたが、これはただの鬼ごっこではないのだ。斬魄刀の能力あり、瞬歩あり。ならば鬼道もありになつてしかるべきだろう。

何？　さつきまで忘れていたのかよこの間抜け……だと？

猫と夜道に気をつけろよ、小僧。

第三十三話：やつたね輝夜、兄弟が増えるよ

ゲーム終了15秒前。果たして、月夜鳥はあっさり捕まつた。4分間たっぷり苦戦していたようだったのに最後の1分でどうやつたのかというと、普通に鬼道を使つたのだった。

しかし、その使い方は普通ではなかつた。

月夜鳥を捕まえるには少々心許ない『這縄』を、広範囲に緩く張り巡らせたのだ。次に適当に追つて、彼にその縄でできた網を見つけさせる。だが、そのまま網を締め上げるのでは彼の能力で簡単に崩されてしまう。だから夜一サンは工夫をした。輝夜の身体を傷つけずに、かつ確実に捕らえられる工夫を。

彼はその網を見て最初にこう言つた。

「わあ、何これ！ 面白そう」

直後、鬼ごっこをしていることさえ忘れて網に乗つたり跳ねたり登つたり、夢中になつて遊びはじめたのである。戻だと警戒もせずに。

なんということはない。要は逃げたくなくなれば良かつた。元々彼は遊びたくて鬼ごっこを提案したのだから、より面白そうな遊びを提案しただけ。鬼ごっこなど5分もすれば飽きるのだ。

「さあて、輝夜に意識を渡してもらおうかの？」

「ちゃんと元に戻れるんやろうな」

疑いの眼差しを向ける平子サンに、月夜鳥は首根っこを掴まれながら大丈夫だよと言つた。

「僕はあるの子のお兄ちゃんだからね」

お兄ちゃん。輝夜が血神として産まれた頃から一緒にいた彼にとって、輝夜はまだまだ小さい弟なのだろう。……精神年齢は置いておいて。

目を閉じて少しすると、月夜鳥が眩い光に包まれる。同調した死神が斬魄刀から完全にわかれるときに発生する光だ。

ゆっくりと光が消え、輝夜が目を開く。

「あれ、こーは……？ ていうかなんでみんな」

「良かつた！ 戻つたんスね～～！」

「うわ、ちょっと……！」

ちゃんと声のトーンや口調が輝夜だと確認して、ふざけたふりで抱きしめた。反応や靈圧などで本人かどうかの最終確認も兼ねて。同調した死神が戻らなかつた例はほとんどないが、今回はイレギュラーなのだ。流石に少しさは心配もする。

それは自分だけではなく、平子サンやひよ里サン、テツサイが輝夜を取り囲んで良かつたと日々に言つている。なんとも暑苦しい光景である。自分はとつとと抜けたので高みの見物なのだが。

「えつと、よくわかんないけど……ただいま？」

人騒がせな彼の弟は、そう言つて頭にはてなを浮かべたまま笑つた。

「——つてことがあつたんだよ」

あの夜の翌朝。お父さんが、記憶のない僕にことの顛末を教えてくれた。知らない間に何やらまたとんでもない事件が起きていたようだ。しかも僕の靈力が作り上げたとかいう刀がその犯人で、彼が今も刀の中にいると聞いて、我ながら訳の分からぬ経歴を持つていて、もりだが全く話についていけなかつた。

まあ、今はその刀に狂犬みたいな種類の存在が宿つてるという理解でいいと言われたので、なんとなくわかつていれば良いのだろう。刀の姿でないと調子が狂うと言つていた狂犬も元に戻してもらつて、万事解決である。

そして数日後、やつと斬魄刀とやらの本質を理解することになる。

「ねえねえ、輝夜。遊ぼうよ～」

「あのね、今宿題してるの！ それにどうやつて遊ぶんだよ」
「輝夜の身体を貸してもらつて、またみんなに遊んでもらう！ この前は楽しかつたなあ。特に最後の網なんか、こつちにはないんだもん」

「輝夜を困らせたら承知しないわよ。あ、こら、待ちなさい！」

頭に直接流し込まれてゐるらしく、こんなにうるさくしても周りには全く聽こえていない。それゆえに誰も助けてくれないのが大変困

るのだ。狂犬だけは助けようとしてくれているが、より騒がしくなるだけというか……。

結局刀は僕の管轄になってしまったし、これからはこの二人とも上手くやつていかなければならぬ。幸い、お父さんたちもそれぞれの斬魄刀を持っているそうだから、コツを聞いて試行錯誤していくしかないだろうけど。

「じゃあ、それが終わつたらおしゃべりしようよ。それだけなら良いでしょ？」

「ま、まあ……。終わつたらね」

この強引きが、故郷の妹を思い出させる。春陽よりは聞き分けも良いが、話に聞くところだと自分を僕の兄だと表現していたそうで。これではどっちが兄だかわからない。

しかたない。家にいる間くらいは話し相手になつてあげようじやないか。

「はいはい、終わつたよ」

「やつたー！ この前の僕すこかつたんだよ、ばーんつてね

「ちよつと、話を盛らないでよ」

「それでね、それでね。あ、あれしようよ。精神世界で鬼ごっこ！」

「せ、精神世界……？」

「うん。目を瞑つて力を入れたら行けるはずだよ」

「輝夜にこつちに来いつて言つてるの!? やめよそんなの」

「えー、なんでだめなのー」

……話を聞いてあげると約束したのは、早計だつたかもしねない。

第三十四話：まあ主人公ですからね

ある日。夏休み中ながらいつもの時間に起こされた僕——浦原輝夜が、目を擦りながらダイニングへと向かつたときのことだつた。庭がとんでもなくうるさいのだ。基本的に浦原商店をうるさくしている原因であるところのジン太は今日の前にいる。なら、誰が……？

「だあああ！ もつかいだ！」

「一護さん!?」

「あ？ 輝夜じやねえか」

何故か、うちに一護さんがいた。今までも何度か朽木さんとかいう女の子と一緒に店に来たことはあるが、がつたり家の敷地に入つていいのを見たのは今日が初めてじゃないか？

「黒崎サン、修行中なんだよ～」

ついさつきまで一護さんとやりあつて（一方的に叩きのめして？）たお父さんがスッと横に現れて軽くよろける。……というか、え？ 「しゅ、修行!? あの!?」

「どの、かはわからぬけど……ま、それだよ」

ほへーという氣の抜けた音が口から漏れでる。そんな、某ジ○ンプ漫画でよく見るような単語をまさか現実で聞くとは思わなかつた。

一護さんは、黒い和服を纏い大剣を持っていた。この服が例の死霸装か。

「あれ、でもなんで？ 急に主人公の器に目覚めたの？」
「なんだよそれ……。ルキアが連れ去られたんだよ」

それを連れ戻すためにやつてんだ、どこつちに来た一護さんが言う。普段より眉間に皺を寄せているように見えるが、かなりとんでもないことを言つているような気がするのは僕だけだろうか。
「連れ去られ……え、一国の姫だつたりするんですか」

「ちげーよ！」

「はつはつは、あながち間違つてもないつスけどね」

「俺のせいだ犯罪者にされちまつたんだ。俺が絶対助けなきやいけね

えから頑張んねえと」

一護さんが拳をぐつと握り込むのが見える。自分のせいで他人が被害を被るのは、自分がそうなるより辛い。一護さんは顔と喋り方は怖いが内面は優しいから、特に心にくるのだろう。

「でもそれなら、こんなところで呑気に特訓なんかしてないで早く行かないとダメなんじや……」

「今行つても一瞬でやられて終わりっスからね。ちゃんと瞬殺されない程度には鍛えないと」

誰に攫われどこに行つたのかすらわからず、当然そこにどんな人がいるのかもわからないけど、お父さんが言うならその通り、一護さんは朽木さんを助けられる力がまだないのだろうが。はたして敵は待つてくれるのか？

しかしながらほど、己の実力が足りないからすぐに助けに行けないのも一護さんがイライラしている理由の一つ、というわけだ。

「さ、輝夜は朝ごはんを食べないと」

「そうだった」

言われて初めて思い出す。それと同時に腹がきゅうと鳴いて、修行がどんなものかもう少し見たかつたなあと後ろ髪を引かれつつも本来の目的地へと向かつた。

……あれ。もしかしたら僕も朽木さんを連れ戻しに行くことになるかもしれないのでは？　回復能力はあるし、斬魄刀とやらもある。お母さん相手にも通用した魅了だつてあるのだ。そうなつてもいいように特訓——修行したほうがいいのだろうか。

朝ごはんを食べながらちよつと考えてみるとしよう。

第三十五話：出発

「出発したあ!?」

「ハイ。昨夜のうちに」

朝起きると重大な作戦のメンバーに置いていかれました。（タイトル）

え、昨日いつ出発するか聞いたら翌々日だつて言つてたよね？日々可愛い大好き愛してるとか愛を囁いてる僕に嘘を教えたというのか。

「ハイ。嘘つス」

絶句するとはまさにこのこと。何も言えず空氣ばかり吐き出す僕に、お父さんは冷ややかな目を向けた。

なんで嘘なんか。来てほしくないなら来るなつて言つてくれればいいじやん。

「いやあ、可愛い輝夜にお願いされたら負けそุดたから……ね？」
「え、ええ、でも、それなら先にはつきり言つてよつ……み、みたいな？」

お父さんに少し生意気な口調で話すのはこれが初めてでもないのに、初めてこんなに緊張している。目が怖くて咄嗟に誤魔化してしまつた。いつもみたいに笑つているように見えて、なんの感情もこもつていないうな目。

「だあつて、輝夜に傷ついてほしくないんスもん」

お前は足手まといだ、なんて言えません。

お父さんは、冗談めかしているのに嫌に冷めた声でそう言つた。

「あ、ぶなかつた……」

「そんな顔するくらいならそのまま言えればいいじやろうが。『輝夜まで行つたら心配で心配で仕事が手につかないから連れてはいけないんだよ、行かないで』とか

「あのねえ、だからボクはそんなんじやないですって」

輝夜と話したあと、自室に入るや否や扉に背を向けてへたり込んだボクを、映像付きの電話を勝手に部屋に繋いだ夜一サンがここぞとば

かりにからかってくる。心配しているのが主な理由ではないとそのたびに返しているのにこうしてまた懲りずにからかいに来るのは、無視しているのか忘れているのか。歳なんじやないのか？

「あ？」

「なんでもないです」

「儂が何度もこういうのは、なにもからかいたいからというだけではない。なーにが『回復要員はすでにいるし、魅了がきちんと効くかもわからない。斬魄刀だってまだまだ使いこなせないはずです。それを除くと一般人よりも弱いから輝夜は連れて行けないっスね』じゃ！」

全く似ていな物真似で再現された。悪意が節々に見えるが、ボクそんな言い方しました？

「……でも、その通りでしよう」

「まあの」

じやが、と真面目な顔に戻り前置きをする。

「さつき輝夜が言つておつた言葉を覚えておるか

「さあ、なんでしたかね」

本当は覚えている。

『僕は弾除けになれる。他の人だと死んじやうかもしれないけど、僕だつたらちゃんと再生する……と思う。そりや、足手まといかもしないけど、守つてもらわなくとも大丈夫だよ。本当は僕も行つたほうが良かつたんじやないの！』

怒つたようにそう言われた瞬間、目の前が真っ暗になつた。すぐに景色は戻つたが、ボクはショックを受けたことにショックを受けたのだった。

「情けないのう、子供にあんなことを言わせるなんて」

「ボクが言わせたんじやないっスよ。ボクには思いつかなかつたんだから」

「言つどる割には凹んどるのう。儂も同罪じやから、人のことは言えんがな」

……どうしてあの子はあんなことを。嘘をついたのは悪かつたと

思っている。でも、あそこまで怒ることなのかな?

「そんなに行きたかつたんスかねえ、尸魂界に」

「頼られたいお年頃なんじやろうよ」

「……はあ。我が子であれど情には左右されない自信があつたんスけど

「お、認めおつたなこの頑固者が」

第三十六話：小学生は見た！

僕は今、真子さんやひよ里たちの住む家にいる。お父さんに『忙しくなるから平子サンのところにお泊まりに行つてきてくれる？』と言われたのだ。

それは、足手まといと言い放った数時間後のことだ。普通の顔をしてるようだつたが、よく見るとちよつとやつれていた。僕に気を使っているのがバレバレである。どうせ『可愛い輝夜に痛い思いをさせたくないけどおねだりされたら絶対許してしま……。いつそ厳しいことを言つて諦めてもらうしかない！』みたいな思考だつたんだろう。言葉も視線も怖かつたからあのときは気づかなかつただけで、結構わかりやすいのだ、あの人は。

……間違えてたら恥ずかしいから『わかってるよ』みたいな態度は取らないけど。

「なんや、そんなこと言われたんか？」
「しばいたるわあいつ……！」

「い、いやいやいや、大丈夫だから」

どうしてここにと聞かれたからさつきあつたことを話したら、ひよ里さんがものすごい形相で指をコキコキ鳴らし始めた。慌てて止めたが、真子さんや白さんは笑つてるし他のみんなも止めてくれない。ど、どうして……。

「あいつ、子供できてから急に不器用になつたな」

「ええなそれ、なんか卑猥で」
「輝夜くんの前でそう言うのやめなよ……」

急に生えてきたリサさんをローズさんが嗜める。

実のところ、既にリサさんの下ネタには慣れてしまつたので、そうやって常識的な指摘を見ると何も感じなくなつた自分に気づかされて恥ずかしくなる。

「あ、そうだ。頼みごとがあるんだつた」
「頼みごとオ？」

ラブさんが僕の言葉を聞いて瞬時に面倒オーラを纏つた。どうし

ようもなさすぎる。しかし『なに嫌そうな顔してんのや！ 輝夜からのお願いなんやぞ！』とひよ里さんが一発入れてくれたのでよしとしよう。よしとして良いのか？

氣を取り直して、本題に戻るために軽く息を吸う。

「あのね、実は——」

「特訓してくれ、だア？」

「う、うん……」

さつきのラブさんと似たような語尾の上げ方だったが、拳西さんが言うとすぐまれたようで少し怖い。こめかみに血管が浮き出るなんて現実にあるんだ。

「やめときや。あいつはただ心配しとるだけなんやから真に受けんでもええんやつて」

「あ、それはわかってる。あのあと落ち込んでたもん」

「喜助……」

いつの間に胡散臭いヘラヘラしたやつから内面ダダ漏れ野郎になつとるんや、と真子さんが頭を抱えた。一護さんにお父さんの話を聞くたびに『あれ？ お父さんってそんな人だつけ』と思っていたのだが、やはり他人から見たら胡散臭いというイメージなのか。

僕の前で見せる表情が本当に本心かというと、そうとは断定できな
いけど。

「特訓はさておき、あんま危ない橋は渡んじやねえぞ」

「ワタシもそう思いマス……。それで怪我でもしたら大変デス」

普通の子ならそうかもしねないが、あいにく僕は普通じやない。今は定期的に血をもらっているから僕なら怪我してもすぐに治つてしまうのだ。みんな忘れているのか？ でも、そもそもお父さんがどうくらいまで伝えてているのかわからないから迂闊なことは言えない。しかし、みんなの反対を押し切つてまで特訓がしたいわけではない。そこまで言うのなら、と素直に諦めて、ここにいる間は普通に遊ぶことにした。

「ふわ……」

寝て二時間程度で起きてしまった。暑くて寝苦しいというほどではないけど一度起きるともう一回寝るの難しいんだよな……。まあ、今は夏休みだし、少しくらい遅く起きても許されるだろう。

あれ？

台所に電気が付いている。まだ日付を跨いで何時間も経つていな時刻だから、不自然ではないのだが……。

なにせ声も聞こえるのだ。こんな夜中に何を喋っているんだ。僕がいたらできない話、ということか？

こつそり近づいてドアに耳を寄せる。

「うーん、聞こえづらいな……」

『……輝夜は……』

お、少し聞こえたぞ。僕の名前？ なんだなんだと耳を押し当てる。

しかし、僕は後悔することになる。なぜなら、僕がいない場所でしかできない話なんて、死神など僕が関わつたら危ない目にあうかもしれない話と――

『あの吸血鬼『狂犬』の血を繼いだ輝夜が、もし俺らの敵になつたとき、誰が止められるんや。なツさけない話やけど俺は無理やで』

「……え？」

――僕のよくない話くらいしかないのだから。

第三十七話：一人と一匹で得られるものもあるつてこと

翌日。僕は真子さんに頼んで、黒崎家にしばらくお泊まりさせてもらうことになった。昨夜のこともあるが、単純に『夏休みお泊まりしよう』という約束を遊子としたからだ。

僕が複雑な心境を必死に隠しているのを白さんが『変な顔ー』と一発で見抜いたのは、白さん特有の不思議パワーだと思いたい。真子さんの目がめちゃくちゃ疑いの光を放っていたような気もするが、全て気のせいである。

さて、今朝までのことは置いておいて、今の説明をしよう。

一心さんはお仕事。夏梨と遊子はお夕飯の買い物に出かけた。一護さんは言うまでもなく朽木さんの救出。

……何をして囚われているのかもどうやつて救出するのかもわからぬが、うまくやれているのだろうか。巻き込まれ体質そうな一護さんのこと、やたらでかい案件に巻き込まれている気もしなくもないが……。

なんて、お母さんと一緒に行つてるんだから、楽勝とまでは行かずともみんな元気に帰つてくるだろう。

話が逸れた。

僕が言いたかったのは、黒崎家にお泊まりしに来たらみんないなくなつてしまつたということなのだ。

いや、みんなではない。一人と数えるのも躊躇われる者が、まだ家にはいた。

「俺様を一人と数えねえでなんて数えんだよ！」

「なんだろう……一匹？」

「まあたしかに、今の見た目的にはそうだな。いやでも最近はよく一護の身体に入るから……なんなんだ？」

勝手に自問しているこのぬいぐるみはコン。なにやつてんの。

中身はぬいぐるみではなく人造人間的なものらしい。よくわから

ないけど、この世界がなんでもありなことは身をもつて知っているからもう何も考えず受け止めることにしている。

「おい！ 輝夜、お前変な顔してんぞ。何かあつたのか？」

「そんなわけないじやん。コンのほうが変な顔だし」

「な、なんだとーー!!」

テンパっている状況でも声に動搖を出さず相手を自分のペースに乗せて操れるなんて、流石は浦原喜助の息子。コンが乗せやすいだけとも言う。

しかしこのぬいぐるみ、なかなかどうして侮れない。おバカかと思つたら鋭いところを突いてくるぞ。それもこれも誤魔化せたからもう関係ないんだけど。

「で？」

「ん？」

「何かあつたのかつて聞いてんだろ」

ダメだつた。

白さんみみたいに不思議パワーを持つてたりするの？ 有り得ないと言い切れないのがこのなんでもありな世界の怖いところである。「なるほどな」

仕方ないから全部説明したが、血神などの話をしても良かつたのだろうか。

「狂犬……ええと、さつき言つた僕の祖先で今は刀になつてるんだけど、その狂犬は、本当に昔すごい吸血鬼だつたらしいんだ。だから反応としては間違つてないし、僕自身死神みたいな能力を持つてるのもあつて、未知数として恐れられるべきではあるんだけど……」

「寂しい、か？」

「ちが、……いや、違くない、のかな」

僕を見上げるその顔が、いつものおちやらけたそれとは違つて真剣だつた。ぬいぐるみのくせに、愛嬌を振りまくだけじゃないのか。「俺様はな、生まれたその日に廃棄が決まつてたんだ」

廃棄。人工的に作られたものだから廃棄と呼んでいるが、それはつまり、動物でいう殺処分ということではないか。昔の吸血鬼と、昔の

僕と同じ。

「ああ。それが嫌で逃げようとして、逃げられなくて。でもいろんな手違いと優しさがあつて、俺はここにいるんだ」

「そうだつたんだ……。大変だつたんだね」

「おうよ！ 俺様の言いたいこと、わかつたか？」

「え、わかんない」

コンが見事にずつこけた。でもしようがないじゃん、なんで説明もなく急に過去の話をするんだよ。どこに注目したらいいかわかんないじやないか。

「だから！ 俺様が言いたかったのは、『要らないと思うやつもいれば、いてほしいと思うやつもいる』ってことだ!! 現に、俺は姉さんと一護が守ってくれてここにいる。お前もある下駄帽子たちが守つてんなら、それが答えだろ」

「捨てる神あれば拾う神あり、みたいなこと？」

「よくわかんねーけど、まあそういうことだ！」

「そつか……」

僕がどれだけ危ない存在だつて、脅威になる危険性がある存在だつて、お父さんもお母さんも我が子のように育ててくれているのだ。

それに、真子さんの言葉には『輝夜がもし俺らの敵になつたら』という条件がついていた。つまり、今ままなら大丈夫だということ。疑いを持たれているからなんだ、今までのようく仲良くしてほしいなら変に強くならなければいいだけのことじゃないか。……強くなろうと思つて強くなれるかは置いておいて。

「ありがと！」

「こら、ばか、ちょちよちよ、形が変わつちまう!!」

「揉んでよりかわいくしてあげよう」

「もうマックスかわいいから遠慮するぜ〜〜!!」

三十八話：悩むは本人ばかりなり

後日談。

僕は後日談という言葉のことを、物語だけで見る現実では使われていない言葉だと思っていた。現実の生活は常に続いている、前日も当日も、まして後日など存在しないだろう、と。

しかし、今回はまさに後日談としか言いようのない出来事があった。

黒崎家にお泊まりした初日から一週間、真子さんたちのアジト(?)に戻つて2日目のことである。

コンに言われた言葉を反芻はんすうし、大丈夫大丈夫と心を落ち着けてはいたものの、やはり少しづだかまりが残つていた。

だって、もしかしたら真子さんが僕と仲良くしてくれるのはお父さんに言われたからなのかもしれないし。あのときはたしかに、と膝を打つたけど、世の中良い人たちじゃない。……世の中を語るには、僕は子供すぎるけど。

ということで、僕は真子さんをはじめとしたみんなを気づかれない程度に避けていたのだが。

「そ、戸魂界に顔見せに行く!?」

「おー、ゴタゴタ片したらやけどな」

いつものようにご飯を食べたらさりげなく自分に割り当てられた部屋に戻ろうとしたとき、真子さんに呼び止められたのだ。それで聞かされたのがさつきの話。

初耳ですが!?

ちなみに、戸魂界についてはめんどいから教えたるわ、としばらくな前に真子さんに教えてもらつた。お父さんやお母さんの言うところの『あの世』のことらしい。

「えつと、それはもしかして、僕が危険因子だから何かあつたときのために……みたいなこと!?」

「なんやそれ、自分危険因子やつたんか」
「ち、違うけど……」

違うと、僕はそう思っているが。

まさに今そこにいる貴方が言つたんでしよう。

しかし、当の本人は早めの厨二病かと怪訝な顔だ。まあ話だけ聞けばそうかもしれないけどさ……。

「いやほら、この前の夜に言つてたじやん！」

「え？ ……あー！ あれ聞いたんか」

「き、聞いたんかって……」

あれ？ 軽くない？ 僕はそれで一週間弱も悩んでたつていうのに。

てつきり、もつとこう……『聞いてしもうたんやな。……そーや、輝夜の力はもう俺らじや抑えられんほどになつとる。隠しどつてすまんかつたな』みたいな、シリアルスな空氣になるものだと思つていたんだけど。

「そんなんちやうわ。あれは『自分の身内、しかも子供に酷いことできるやつが誰もおらん』つちゅー話や」

「ど、どういうこと……？」

「まあ待てや。順番に説明したる」

曰く、お父さんは僕と会わせたい人物がいるらしい。正確に言うと、僕を見せたい人物、のようだが。

その人に会わせるために僕を戸魂界に連れて行きたいところだが、二つの問題があつた。

一つ目。

今はお母さんたちが大暴れしている件で戸魂界は混乱を極めており、今行くとうつかり斬り殺されかねないこと。真子さんの口ぶりでは、落ち着くまで年単位でかかるかもしれないとの想定のようだ。そりやそうだ、100年も前の悪事を白日の元に曝そうとしているのだから。

二つ目。

こちらは僕にも関わる問題だ。

大罪人の息子であり、殲滅対象だつた吸血鬼の末裔の僕が、果たして手放しで戸魂界に遊びに行けるのかということ。大罪人の息子、と

いうのは一つ目の解決とともになんとかなるとして、吸血鬼の血を引いていることはどうにかできることではない。

どうにかするには、周りが僕にきちんと首輪をつけて無闇に噛み付かないようにするしかないのだが……。肝心の周りの人間が、面倒を見ている子供の僕をどうこうなど考えられないと口を揃えて言うのだった。おいおい、それはどうなんだ……？ 拳西さんや白さんあたりは拳で止めてくれそうだけどなあ。

そんなわけで、僕がまた変な力に目覚めると困るので、まだ暴力を使わずに解決できる今の弱い僕のままでいてほしい、と話していたのが先日の夜だった。

「しつかし、喜助のやつがとんでもないもんを作ろうとしててな」「お父さんが？」

「一時的に斬魄刀の能力を使えなくさせる塗り薬、やつたか。あんなあつたら藍染なんか一発やで」

僕のためにそんなすごいもの作つてる暇があるならラスボスを倒すためのものの開発に時間を割きなよ！

危うく叫ぶところだつた。親バカすぎないか？

「それに、特殊な眼鏡も作る言うてたしな。あのときの言葉は忘れてええよ」

「え、あの『特訓するのは困る』ってやつ？」

「なんやつたら俺らが特訓つけてやつてもええで」「遠慮します……」

ニヤニヤしながら声のトーンを抑えて言わないでほしい。元からものすごい胡散臭いオーラが5割増しになつて、無意識にノータイムで断つちやうから。本当は自衛くらいはできるくらいになりたかったのに……。

なんだつて、見た目も精神年齢も10歳そこそことだけど、実年齢はもう20を超えているのだ。いつまでも守られるばかりではいたくない。

……仕方ない、身のこなしくらいは誰かに教えてもらうとしよう。ひよ里さんとか、白さんとかに。間違つても真子さんやラブさんには

頼まない。変なこと教えられそうだ、必殺技とか。

ということで、無事仲直りをしたというか誤解が解けたというか、なんとも言えない疑念を払うことができた。

「行ってきます！」

「い、行ってきます……！」

「おう！ 気をつけてなー！」

そして僕は、新学期を迎えた。

第三十九話：狂犬は苦労人

夏休みを終えて新学期が始まる日、僕は黒崎家で目を覚ました。とは言つても、どこか怪我をして黒崎医院にお世話になつたわけではない。僕なら怪我してもすぐ治るしね。

だから、普通に居候である。家事の一部も任されて、もはや客扱いですらない。いや、いいんだけど。むしろ最初の頃は何もしなくていいと言われて申し訳なかつたから、仕事があるのは実はありがたい。2週間前。『しばらく家にいられないかも知れないから』とお父さんに言われたので真子さんのところへ行くのかと思ったら、迎えに来たのは一心さんだつた。一心さんがニコニコしながら僕の手を引くのに対して、お父さんはといえば歯を食いしばりながらなんとかにこやかに手を振つていた。

手、震えますよ……。

そんなこんなでここに来た僕であるが、この生活はいつまで続くのだろうか。黒崎家では血が摂取できない。血がないと困ることもないが、1、2週間に一回血を飲むのはもはや習慣と化しているので少し寂しい。それに、飲まないと少しお腹が空く気がする。去年まで血を飲まなくとも空かなかつたのは感覚が麻痺していただろうなあ。一心さんに話は通してあるようで無闇に昼連れ出すようなことはしないものの、流石に血はもらつてない。そもそも一心さんは僕のことについて教えられているのかを僕は知らなかつた。

「ねえ狂犬、どう思う？」

「……まさかしないとは思うけど、人目があるところで私に話しかけないでね。怪しい人だとと思われるから」

家に帰り、こつそりリュックに入れて黒崎家に持つてきた狂犬に話しかけた。部屋は僕の提案で一護さんと同じ部屋になつたため、そばにはコンもいる。

コンは、『それが話に聞く……』と引き気味にこちらを見ていた。
「ま、聞いてみるしかないんじゃない？ それでなくともさりげなく探しを入れてみるとか」

「ぬ、抜き身じやなくとも話できるんだな……」

「何？ ジロジロ見ないでほしいんだけど」

「アツすみません」

「な、仲良くしよう……？」

コンがベッドの上で体操座りして泣き出した。怖かつたね……。
かわいそうに。虫の居所が悪い狂犬に話しかけるとは、なんてタイミングの悪い……。実は、お父さんをあまり良く思つてない狂犬は、『あの野郎私の大事な子孫を放つておくなんて！』と怒つているのだった。

狂犬、僕の斬魄刀『月夜鳥』と話すようになつてからどんどん口が悪くなつている気がする。僕に聞こえないように話すこともあるようで、たまにぐつたりしているし……。実は苦労人なのかも知れない。

「あ、ごめんなさい一心さん、僕あんまそういうの得意じやなくて」
毎日の日課の洗濯物を終え、晩御飯を作つて一心さんに言う。
今日の献立はラーメンらしいが、なんとなく苦手なのだ。

ちなみに、今日は遊子に楽をしてもらう日だ。毎日小学生の娘にご飯を作つてもらつてるのは、父親としてやはり思うものがあるのだろう。それでラーメンというのもどうかとは思うけど。

「そうなのか。すまねえ、じゃあ輝夜ちゃんだけうどんでいいか？」
「あ、うどんなら食べられます。ありがとうございます」

「おう！ 他に苦手なものとかあるか？」

「苦手なもの……。そうですね、洋風のパスタとか、焼肉とかかな」「そりやまたうまそうなもんばつかを……」

一心さんが微妙な顔をする。お母さんも似たようなことを言つていた。人生半分損しとる！ みたいな。

「あ」

「？」

「それつて、もしかして吸血鬼的なやつか？ ニンニクがダメ、つてことだろ？」

「う、嘘……そういうことだつたのか」

たしかに、思い返せば苦手なもののはほとんどがニンニクの入ったものだった。味や食感が苦手つてわけでもないからなんなんだろうと思つていたけど、臭いだつたのか……。
つて、え。

「きゅ、吸血鬼の末裔だつて知つて……？」

「あれ、言つちゃいかんやつだつたか!?」

「あ、いや、大丈夫なんですけど……なんというか、知つてたんですね」

「おう、あいつからな」

思わぬところで気になることが確認できてしまつた。やつぱりお父さんから伝えられてたのかよ！

それにして、『吸血鬼の末裔』というワードの語感の恥ずかしさはなんとかならないものか。言う側も聞く側も少し気まずい。
『……ごめんなさい』

狂犬が僕にだけ聞こえるようにそう言つた。
狂犬のせいじやないよ……。

第四十話：初めましてキヤンセラーブ崎

さて、このあと月単位で親に放つておかれ黒崎家に大変お世話をなる僕であるが、その間何をしていたかというと、取り立てて特殊なことはしていなかつた。

特訓してやると言つた真子さんたちと全く連絡が取れなくなつたのだ。多分お母さんと同じように、自分の持ち場についたつてことなのだろう。

だから僕はいつものように本を読んだりゲームをしたり家事を手伝つたりと、学校に行く以外は安定の引きこもり生活を送つていた。と、思つて いたのだが。

「お、輝夜じやねえか」

呑気に手を挙げて僕の名前を呼ぶ一護さんの他に、僕と同じくらいの背の男の子や目つきの悪い男たち、露出の多い女の人がそこにはいた。

……なんだこの状況は。

このときの僕の心情を表すならば、動搖。この二文字に尽きる。

「大丈夫か？　ずっと固まつてつけど」

「あの……変なもの買わされそうになつてもちやんと断らなきやだめですよ。『俺はいらないです』つてキッパリ断るのがコツです」

「ブフツ」

耳打ちのようにして教えたのに後ろに聞こえていたらしい、赤い髪とスキンヘッドの男の人人がゲラゲラ笑つた。

「こいつらをなんだと思つてんだ!?」

「え、怪しいクスリとか売る人……？」

「クスリつて……！」

一護さんまで笑い始めてしまつた。もしかして違うのか……!?

「失礼しました……！」

「大丈夫よー！　あ一笑わせてもらつちゃつたわ」

まさか死神さんだつたなんて。黒い和服を着てなかつたから、てつかりやばい人たちかと思つて無礼なことを言つてしまつた。

「ねえ、その子は誰なの?」

「ああコイツ? 妹の友達で、今お泊まり会らしい」

黒髪の人相が悪くないお兄さんの視線がこちらへ向く。うひやあ、人見知りには効きすぎる攻撃だ。

自己紹介の流れか……。

浦原輝夜です、お父さんがお世話になつてます。浦原輝夜です、お父さんがお世話になつてます。浦原輝夜です、お父さんがお世話になつてます。

よし、いける!

「えつと、うらは——」

「ああああああああああ!!!!」

「親父!」

「な、何事!?」

僕が名乗るのに被せて、一心さんが叫ぶ声がした。

一世一代の覚悟で挑んだ自己紹介は失敗に終わつてしまつたが、今は一心さんが先。

僕は急いで一護さんの後を追つた。

なんだつたんだ……?

結局あのあと、一心さんに怪我はなく何かが壊れたわけでもなく。本人に聞いたら『なんでもないぜ!!? それより、今日はずっとリビングで遊ばねえ? 寂しいよお』としか喋らなくなつてしまつた。『なあ知つてるか?』と言われてちよつと見栄張つて『はい』と答えたら『そうか、だよな! あんなの知らないやついいねえもん』としか喋らなくなつたNPCみたいだ。

その割に、僕が二階に行こうとすれば慌てて力づくで引き止めるつて……やっぱりあの人たち、やばい人たちなんじや?

危ねえどこだつた。

浦原のやつに、輝夜には迂闊に名乗らせるなつて言われてんだ。特

に、誰もいなはづのうちでなんて、絶対死神相手だろ。

大体、浦原も浦原だ。なにが『知らない人には気をつけてつて言つ

てるんで大丈夫だとは思うんスけどね』『だよ！ 全然危機感ないぞ

あの子、実の親に殺されかけたんじやなかつたのかよ！？

ふと目線を上げると、自分で出したらしいオレンジジュースをちま
ちま飲んでいた。

友人の親で親の友人だからってこんなに馴染むもんか？ まあそ
うだよなあ、まだ小学五年生だもんなんあ……。
まつたく、これから心労がやばそうだ。

「……？」

「いや、なんでもねえよ……」

第四十一話：知上村、再来！

「お、お……せわに、なり……ま、」

「無理しなくていい。苦手なものはそうすぐには克服できないものだからね。……つて、僕が言うことでもないな、すまない」

「いえ、そんなことは……！」

僕の目線の先には血の繋がった父、千樹郎さん。その距離は3メートルは離れていて、僕の情けない腰の引けっぷりに千樹郎さんは困ったように笑っている。

ああ、なんでこんなことに。

発端はつい2時間前、黒崎家のことだつた。何ヶ月と見てなかつたお母さんが久々に顔を出したのだ。やつと帰れるのと聞こうとしたとき、お母さんはこう言つた。

「お主が見つかるとまずい。これから別の場所に移るぞ」

次の瞬間にはもう知上村にいた。

以前経験したことがある、瞬歩だろう。前とは距離も速さも段違いで、あのときは加減してくれていたことを今更ながら知る。いや、今も加減してこれなのかもしれない。

……冷静ぶつていてるが、ただ驚きが一周回つて変に頭が回つているだけだ。『久しぶり、元気してた？』みたいに大して仲良くなかった人とするような会話をちらなく連れ去られたのだ。

しかしお母さんは全くそんな心の機微を感じさせない表情で口を開く。

「こ、じやつたら安心じや。流石のあやつも空座町で手一杯じやろう。じゃが万一小もある、できれば斬魄刀の能力で緊急避難できるよう練習しておくよに」

「え、ちょ、ちょっと!?」

「大丈夫、村には儂らが話してある。妹もおるんじやろ？ たまには水入らずで過ごしてこい」

「ねえ待つてつて！ ちょ、ふざけんなーー!!」

お母さんは、そのまま言いたいことだけ言つて去つていった。

水入らずつて言つたつて、僕とあの千樹郎さんでは『よく來たね、大変だつただろ』『いやいや。最近帰れなくてごめんね父さん』みたいな会話はできないつて知つてるだろうに。それに、どちらかというとその会話はさつきしたかつたよ僕は。

そして今に至るわけだけど……。

向こうにも気を遣わせているようだからなんとかしたいが、それができたら苦労しない。いくら元々住んでいたとはいえ現在は他人の家にそんなに気軽にホイホイ入れるものでもなく。

そもそも僕はこの人が苦手なのだ。前は普通に話せたような気がするが、お父さんがいたからまだ安心できただけだつたらしい。

せめて、誰かこの空氣を壊してくれたら。そう思つた瞬間、バタバタと大きな足音がした。

「お兄様！ 遊びに来てくれたんですね！」

「は、春陽!?」

ぐえ、くるし……と息も絶え絶えに伝えると、千樹郎さんが引き剥がしてくれた。しばらくぶりに見た妹、32代目血神『川獺』は、おんばが服を着たみたいに着物は着崩れ髪はぼさぼさで、全然変わつていなかつた。

「だ、大丈夫かい……？」

「はー、はー……はい。ありがとうございます」

「お父様、お兄様がいます！」

「今日からしばらくうちで暮らすことになつたんだ、今の親御さんの都合でね」

「あ、うん。いつまでかわからないけど、お世話になるよ」

「そうだつたんですか！ また一緒に遊びましょうね！」

「まあ、ほどほどにね……」

春陽との鞠遊びを思い出してげんなりしたのを顔に出さないよう笑う。あれは……大変だつたから……。できればお兄ちゃん、家の中で大人しく遊びたいな……。

我ながら情けないことに、春陽に身体を揺らされて既に疲れてしまつてゐる。どんどん遊ぼうね！ とは言えないのが辛いところだ。

「では、輝夜くんの部屋を案内しよう」

「え、あの部屋じゃないんですか」

10年弱過ごしていったあの書物しかない部屋ではないのか。今では窓が一つもなく家具もほとんどないというのは珍しいと思えるが、あれはあれで慣れれば過ごしやすかつたのに。

「いやいや、客人を書庫に泊まらせるわけにはいかないだろう。ちやんと部屋もあるんだから、そつちで寝なさい」

「……あれ、書庫だつたんですか」

「う、うん……。ごめんなさい」

「あ、そういう意味で言つたのではなく、ただ驚いただけで……」

「お二人とも、仲良くしてください！」

10年越しの事実を知りまた変な空気になってしまった僕たちに気づき、春陽が背中を叩いて喝を入れる。

まだ幼いくせにその手のひらはとても力強く、しばらく息ができるなくなってしまった。それは千樹郎さんもそうらしく、変な姿勢で10秒ほどぎくしまつていた。

変な空気になるたびこれを食らうなんて、この先やつていけるんだろうか……。僕は年末の笑つたら痛いお仕置きが待つテレビ番組に思いを馳せながら、案内を再開した千樹郎さんの後ろを歩き出した。

最終話：おはなしにもならない

知上村にて、本来の父である千樹郎と親子ではなくただの知人関係になることに決めた輝夜。どうしても微妙な空気になつてしまふが、それを何度も緩衝材として繋いだのは妹の春陽だつた。

春陽の助力もあつて徐々に気まずくなくなり、最後には一皮むけて一つ大人になる。

やつと浦原喜助曰く『ゴタゴタ』が終わつたらしい、ということではじめての『戸魂界編』。

いろんな人にマジマジと見られるみんな自分のこと知つてゐるしで困惑する輝夜であつたが、両親の助けによつてなんとか目的の場所に到着した。

そこは、十三番隊隊舎。伯父との対面である。

浮竹は、反抗期だつた弟がいつのまにか父親になつていたことについたく感動し、輝夜を可愛がる。輝夜が語る弟の話から自分に会いたくない、会えないと思っていることが見てとれるので、浮竹は元気にしているだけで良いと遠くにいる家族に思いを馳せた。

父親も母親もどこかに行つてしまつたようだし散歩でもするかと外をぶらつくと、なにやらふかふかのものにぶつかる。

見上げると、大きな犬。声にならない叫び声を上げて逃げようとしても捕まつてしまつた。輝夜はこと大きい犬が苦手だつた。暴れる輝夜、宥める狛村。まさにカオスな状況を打破したのは、扇子に姿を変えた狂犬だ。輝夜に喝を入れ、狛村に宥め方のアドバイスをし、見事輝夜を落ち着かせることに成功する。

しばらく戸魂界について話を聴きながら、抱き抱えられつつ散歩を楽しむ。大きい犬だけど良い人じやんと認識を改め、苦手意識も薄れて懷いた。

一方浦原は「さつき子供が狛村隊長と一緒に歩いていた」という話を耳にして探し回る。あの子は大きい犬が苦手だつたはず、そう考えてやつと見つけた輝夜は、狛村と仲良く散歩をしていた。心配して損したやら、元気にしててよかつたやら。しかし、思い至る限り最悪な

ケースはビビつて攻撃することだつたため、そうなつてなくて良かつたのだろう。

他にも、マユリがその貴重な血を採取したり解剖したりしたいとい寄つてきたり、ネムと仲良くなつたり、瀬靈廷のたくさんの人可愛がられる輝夜。

現世に帰るころにはすっかり疲れて親の背でぐつすり眠つていた。本当は千年決戦編に参加して何度も四肢が千切れては再生したり、狂犬しなづのどりと斬魄刀が力を合わせて卍解したり（卍解したときの名前は血神『不死鳥』とか考えてました）、死にかける輝夜の命を繋ぐものとして狂犬が輝夜の心臓部に入りひとつになる展開まで考えてありました。

番外編 少年の日常

番外編：参観日→地獄

これは、輝夜が小学校3年生のときの話である。

今日は土曜日。普通は授業がない休日のはずだが、輝夜は教室にいた。後ろにはたくさんの大人たち。そう、三ヶ月に一度の授業参観日である。

科目は算数。苦手な科目だつたが、幸いにも輝夜は先生に当てられることなく45分を終えた。

しかし、地獄はここからだつた。

「あれお父さん？ す、すごいんだね……」

「あつちは遊子ちゃんと夏梨ちゃんのパパだよね……？」

「えへへ、そななんだ……」

「……さあ、知らない人だよ」

輝夜の父、浦原喜助と黒崎姉妹の父、黒崎一心が非常に目立つていたのだ。もちろん、悪い意味で。

二人とも、バツチリ決めたジャケットに革靴を着用している。それだけでこれでもかと主張しているのだが。

「はあ？ いくら一心サンでも許せません！ 世界一可愛いのは輝夜でしようが！」

「なんだとこの野郎！ 宇宙一可愛いのはうちの遊子と夏梨に決まつてるんだよ!!」

「うるつせえよバカ親父！」

一人は、あろうことか狭い教室で言い争っていた。

「はあ……」

輝夜は、父親が大声で自分の名前を叫んだせいで他人のふりもできず悩んでいた。迷惑な二人に蹴りを入れに行つた夏梨を見届けた遊子も憂鬱そうだ。

輝夜と遊子、夏梨は特段仲が良いわけではない。お互いに苗字で呼び合はし、同じクラスになつたこともなかつた。父親同士が顔見知り

らしい程度の認識しかしていなかつたのだが。

3年生になつて同じクラスになると、二人は授業参観のたびにこのような言い争いをするようになつてしまつた。夏梨が他人の父親も関係なく制裁を加えてくれるのが唯一の救いだ。

「ねえ、浦原くん。なんとかできないかな……？」

「できるならなんとかしたいけど……あ、そうだ！ 耳貸して」

遊子に耳打ちする。解決策が予想外のことだつたのか、遊子はぱちぱちと瞬きしてそれから嬉しそうに笑つた。

「すつごくいい案だね！」

「でしょ。これを言つたら絶対喧嘩やめてくれると思うよ」

「遊子と夏梨が一緒に寝てる写真を見ろ！ 天使以外の何者でもないだろうが」

「あなたこそ見てくださいよ。あの愛くるしい瞳、素直になれない性格！ クラスの子と話すのに恥ずかしそうに笑うんですよ!?」

作戦会議を終えて騒がしい中心に来てみると、さつきより悪化していた。最後の良心、夏梨はトイレに行つたようだ。

輝夜は遊子とアイコンタクトをする。呼吸を合わせて同時に口を開いた。

「それ以上喧嘩するなら黒崎（浦原）さんちの子になるよ！」

我が子の言葉を理解した二人は思つた。

こいつにだけはこの子を渡しちゃいけない。

こうして、浦原喜助と黒崎一心のはた迷惑な口喧嘩は幕を閉じ、二度と行われることはなかつたのであつた。そして、輝夜と遊子、夏梨はお互いを下の名前で呼び合うことになつた。

番外編：静かに買い物もできない1

「お三方。くろぐれも迷子にならないように」

テツサイさんの言葉に、僕と雨、ジン太の三人は頷いた。

今日はショッピングモールに来ている。右を見ても店店店、左を見ても店店店。14階まであるようだから、テツサイさんが言うように迷子になつたら大変だ。

ここに来たのは洋服を買うため。半分引きこもりの僕には必要ないと思っていたが、少し前に話すようになった黒崎姉妹に言われてしまつたのだ。

『なんでそんなおじいちゃんみたいな色の服着てるの？』

『つーか、いつも同じ服着てるよな。ちゃんと服持つてる？』

今ある服といえば、深緑のパークーとジーパン、ちょっと柄が違うTシャツだけ。それと同じものが何十着もあるから、一応毎日違う服着てるよ。

ドヤ顔でそう言うと、おしゃれさんな遊子と夏梨にたいそう怒られた。親が選んでるなら別の人を選んでもらえ。いやいつそのこと自分で選べ。二倍の勢いに僕ははいとしか言えなかつた。

というわけで、ここにいるのはセンスは不明だが頼りになる保護者のテツサイさんと、女の子だからきつとセンスもいいはずの雨、勝手についてきたジン太、今回の主役の僕だけだ。両親はいない。仕事があつて行けないとお父さんが半泣きで言つていた。僕の服はお父さんが選んでいるため、仕事がなくとも連れて行くことはないが。

お母さんもなにやら用事があるようだつたが、用事がなくとも長時間人間の姿でいなければならないとなれば行かないだろう。服を着たくないと言つるのはいいが、外でうつかり公然わいせつ罪で捕まらないようにしてほしい。

「最初はどこに行くの？」

「オレあそこ行きてえ」

「ふむ、靴屋ですか」

では参りましょう、と言つてテツサイさんは奥に消えてしまった。

他の用事も効率よく済ますため行く順番はきつちり決めてあつただろうに、ジン太の適当な一言でまるつきり変わってしまった。

「靴屋なんて行く予定じやなかつたじゃん」

「オレが行きたくなつたからしようがねえだろ」

「しようがなくない。そういうのは事前に言わないと」

「あの……早く行かなきや、はぐれちやう……」

雨に袖をひかれて思い出す。こんなところで言い合いをしている場合じやない。僕たちは慌ててテツサイさんを追いかけた。

なんとか追いつき、ジン太は軽くて速く走れるという謳い文句の靴を買つてもらつた。速く走りたいという気持ちが僕には理解できないが、ジン太も雨もたまに虚退治をしているらしいと聞けば納得はできる。しかし、二人とも力が強いのは知っているがこんな子供に虚退治させなければならないなんて。あの世の人たちは何をしているんだ。

「つ、次は……どうするんですか……？」

「ええと、服屋にはいかなくちやいけないから……」

ぐう。

お腹が鳴つてしまつた。

「腹減つてんのかよ。じゃあ昼メシ食おーぜ」

「で、でも僕の目的は服を買うことで、」

「そこにフードコートがあるようです。参りますぞ」

僕の（お腹の）せいで、予定が変わつてしまつた。僕のほうがしかたなさは遙かに上だが、これではジン太と似たようなものだ。ちら、とテツサイさんを見上げると、いつもの無表情で前を向いていた。怒つては、ない、みたい？ というか、逆に嬉しそうな気もする。嬉しい要素はなかつたはずなので、気のせいだろうけど。

「お、ラーメンあんじyan！」

「たこ焼きも……！」

……まあ、二人が嬉しそうだから良しとしよう。

番外編：静かに買い物もできない2

腹ごしらえも終わり、僕たちはようやく服屋に向かった。

「すげー！　これ全部服なのかよ！」

「このショッピングモールの目玉っぽいね」

店に入る前から、視界全部が服ばかり。冷静なふりをしているが、僕も圧倒されてテンションが上がる。興味のないものでもこんなに多いと楽しいんだな。

「どんなのがいいと思う？」雨

「えっと……可愛い色が、似合うと思うよ」

雨が手にしたのは、ピンクと水色のトレーナー。僕が可愛いらしいのはいろんな人から言われて知っているが、ピンクと水色ときとか……。深緑ばかり着ていた僕に、明るい色はハードルが高い。

次に見せてくれたのは藤色のシャツ、その次は薄い青緑のパーカー。そういえば雨はいつも『浦原商店』と書かれた白いTシャツに淡いピンクの膝丈スカートを着ているんだった。おしゃれとかそういうじゃないとか以前に、服をそれ以外知らないのかもしれない。

「ごめん、やっぱ自分で考えてみるね」

「ううん……！　役に立てなくて、ごめんね」

雨が傷つかないように気をつけて言つたつもりだが、どうやらまた傷つてしまつたらしい。そうじゃないよとフォローしてから別れる。

雨は、僕と同じ年のわりに腰が低い。それに、下手なことを言つたら泣いてしまうこともある。きつい言葉を使うことの多い僕は特に気をつけるように、とテツサイさんに言われているのだ。もちろん、そうでなくともわざわざ優しい雨を泣かせたいなんて思わないが。

「これ……は派手すぎるかな」

適当に目についたものを手に取つてみる。側面しか見えなかつたからわからなかつたが、表に大きなワッペンが五つも付いていた。急いで戻して、近くをうろつく。

良いと思うものは既に持つているようなものばかり。脳内の遊子

と夏梨が首を振つて哀れなものを見る目で見てくる。どうせなら二人にも来てもらえば良かつた。

「あれ、輝夜くん？」

悩んでいると、後ろから声をかけられた。高い声、幼い喋り方にこの呼び方は。

「遊子！」

振り向くとそこには、やはりというか、黒崎遊子がいた。

「ねえねえ、輝夜くんがいるよ！」

「わ、ほんとだ」

しかも隣の棚の陰からは夏梨まで出てくる。噂をすればなんとやらとは言うが、本当にそんなことがあるのか。

「服選んでんの？」

「うん。でも全然わかんなくて」

だから選ぶの手伝つてほしい、と恥を忍んで頼んでみたら、二つ返事でオーケーされた。

ついでにメモに連絡先を書いて手渡された。これで服を買うときは電話で一緒に来てほしいと頼むことができる。携帯電話を持つていないうちから家からかけないといけないが。……からかわれる未来が見えた。しばらくはこの番号を使う機会はなさそうだ。

番外編：静かに買い物もできない3

輝夜が迷子になつた。

本人に自覚があるかどうかはわからないが、少なくともテツサイ、雨、ジン太の三人が10分探しても見つかなかつたのだ。

それでも、迷子センターにアナウンスしてもらう手は最後にした。三人の関係を疑われると困るためだ。それに、輝夜は目立つのを嫌う。10歳にもなつて迷子センターなんて！ と嘆く姿が三人の脳裏に過ぎつた。

服屋は大きく、中で悩んでいるうちに遠くへ行つてしまつた可能性は大きいにある。それなら、三人で店内を探す方が良いはずだ。そう考えて探してみるが、やはり見つからない。

「どうでしたか」

「ダメだ、見つかねえ」

焦りは強くなつていく。特に雨は、最後に輝夜と会つていることもあって既に泣きそうだ。

「ごめんなさい……私が一人にしちやつたんです…………」

「そんなの言つてもしようがねえだろ！ 二手にわかれ探そuz」

珍しく眞面目なジン太の提案で、雨とジン太、テツサイとわかれることになつた。雨ジン太グループが迷子になつては元も子もないので、服屋のメンズだけを探すように決める。テツサイはレディース側だ。

事前に決めた集合場所に10分後に集まることを約束して、三人はそれぞれ持ち場についた。

「私のせいだ……」

「まだ言つてんのかよ！ あの弱つちい輝夜から目を離したのはみんな一緒だろ」

まだ涙ぐんでいる雨を雑に慰めながら、ジン太はしかしかなり焦つていた。輝夜は歳上だが、細くて小さくて、腕つ節だつて強くない。揚おうと思えば簡単にできてしまう。

思考は悪い方は悪い方へと流れ、もうこのショッピングモールに

はいなかもしれないとまで思つてしまつた。

「あの、ジン太くんのせいじゃ……」

「わかつてる！」

自分のことで精一杯の雨にまで不安が伝わったのかと思うと、情けなくてしかたない。ジン太は手を握りしめて開いてを何度も繰り返し、大きなため息を一つついて一旦心を落ち着かせた。

一方雨はと、涙の余韻をぐすぐす鳴らしながらもなんとか輝夜を見つけ出そうとしていた。

気の弱い彼女にとつて人に話しかけるのは虚退治の何倍も難しいことだ。しかし、ほとんど兄弟のような存在である輝夜を見つけるためならばと勇気を振り絞つて聞き込みを続けた。

それも五人になつたところで心が折れそうになる。誰も輝夜のことを見ていないのだ。見ていたも、小さな子のことなど気に留めいない。雨は、どうしたらいいかわからなくなつてしまつた。

「……そろそろ10分だ」

「うん……。もしかしたら、見つけてるかもしれないし」

「ねえ、本当にこれ着るの……？」

「うん！ 絶対似合うよ」

僕の手には、どう見ても女の子用の半ズボン。膝上何センチだよ、とツッコみたくなる丈だ。

あれから僕は、黒崎姉妹の手で着せ替え人形にされていた。メンズからレディースから、本当にいろんな服を着せられて、僕の少ない体力はすでにほとんどなくなつた。

「これは？」

「や、こっちのが似合うつて」

二人は面白がつてコーディネートバトルのようなことをしていく楽しそうだ。……本人そっちのけで。

早く帰りたい。三人置いてきちやつたから、みんな心配してるかもしれない。姉妹には悪いけど、そこそこ良い感じの服を何着か見繕つてもらつて戻ろう。

「あのさ、そろそろ」

「次はこれ着て！ 絶対似合うよ！」

「ハイ……」

僕は、弱い。

三人が集まつたのは、メンズとレディースの棚の境だ。両側に試着室があり、そこから輝夜が出てくることも考慮してのことだった。「どうだつた!?」

「いえ……。そちらもですか」

テツサイも、結局輝夜を見つけることはできなかつた。10分前にわかれでから、保護者として不甲斐ないと自分を責めても意味がないと急いで探し回つた。しかし初対面だと怖がられることの多い巨躯のせいで雨のように聞き込みができないこともあつて、輝夜探しは難航していた。

「これもいいかも！」

そこに、声が聞こえた。輝夜のものではないが、同じくらいの女の子のものだ。ジン太には聞き覚えがあつた。よく駄菓子を買いにくくする女の子。彼女は輝夜と同い年で、仲が良かつたはずだ。

そちらを見ると、やはり彼女、黒崎遊子だつた。柔らかい茶色の髪を短く切つているタレ目の穏やかな少女。

「ジン太殿！」

テツサイの通る声も無視して走りだす。何か知つていると信じて。

「おい、お前！」

「あれ？ あなたは、駄菓子屋の……」

「輝夜知らねえか!?」

彼女は、突然現れた顔見知りにキヨトンとした。ジン太はその一瞬も待ちきれず、本題を叫ぶようにして伝える。すると、遊子の返事より先に、後ろからシャツとカーテンの音が聞こえた。

「え、ジン太？」

続いて聞こえたのは、間抜けな声。見なくてもわかる。三人が必死に探していた、浦原輝夜だ。

「う、うう……うわあああん」

「わ、ちょっと、雨！」

最初に動いたのは雨だった。堪えていた涙をぼろぼろ溢して輝夜に抱きつく。輝夜の方が背が低いのもあってよろけるが、お構いなしだ。

「え、うぐ……」

そして、状況をようやく把握できたジン太も泣き出してしまった。なんとしても探し出さなくてはという使命感で、ピンと張っていた気が緩んでしまい、涙はしばらく止まりそうになかった。

二人を受け止めてはいるがよくわかっていない輝夜は、よくわからないうがらもよしよしと背中をさすつてみる。テツサイに視線を向けると、眉間のしわがいつもより多かつた。わかりづらいが、かなり怒っている。

「あの、どういう状況……？」

「……心配いたしました」

「え、もしかして迷子だと思つて探してたの」

ようやく状況が飲み込めたのか、輝夜は大きなため息をつく。双子に僕が振り回されてる間に、どうやら大事になつてしまつていたらしい。輝夜は困惑の面持ちで頬をかいた。

「えつと、ごめん。心配かけちゃつて」

「う、ひっく、ううん。ぶじで、よ、よかつ……」

「……ユーカイされたのかと思つた」

「うん……。ごめん、ありがとう」

その後、輝夜は二人が泣き止むまでテツサイに叱られたのだった。

そして、試着中だつた服は涙で汚れて買い取ることになつてしまつた。しかし幸か不幸か、父親が気に入つて輝夜が定期的に着るはめになつたため、それがタンスのこやしになることはなかつた。

番外編：かぐちやん、そうちやん

「ええと……藍染さん、でいいんですよね」

「ああ。君は浦原喜助の娘の」

「息子です。浦原輝夜」

面倒がつて髪をしばらく切つてなかつただけで会う人会う人に言われるけど、れつきとした男です。まさか本氣で娘だと思つてもないんだろうが、冗談かわからないポーカーフエイスで言われるものだから我ながら凄い勢いで訂正してしまつた。父を嵌めた男だと聞いていたが結構緩いというかなんというか、誰から見ても第一印象が『良い人』になるような人だ。

そもそもなんで藍染惣右介と普通に会話しているのかというと、実は僕もわからない。気づいたら僕はこの家具もない四方が白い部屋にいて、それは藍染さんも同じようだつたのだ。藍染さんの能力については少し前に聞いているけど、始解を見たことはないから術中に嵌つているわけでもなきそうだ。

「どうしたんだい？」浦原輝夜くん

「フルネームで呼ぶのやめてもらえますか……？ そんな警戒される存在じやないですし」

「ほう、面白いことを言うね。あの『狂犬』の血を引く者なのに」

「ええ……狂犬は関係ないですよ。僕ができることってほとんどないんですつて」

「ちなみに、何ができるんだい」

「えっとですね、」

おつと。

そういえばお父さんに、他人に能力を教えてはならないときつく言われてたんだつた。危ない、これが藍染惣右介の恐ろしさか。

なんとかして誤魔化さないと。

「えつと……屈伸とか」

「それは……日常生活が大変そうだね」

同情された。しかし、屈伸しかできない人を前にしたら僕もそう言

わざるを得ないので怒るに怒れない。藍染惣右介、話術が巧みすぎる。

「それで、かぐちゃん」

「急に砕けましたねそうちやん」

「吸血鬼には眷属という概念はあるのだろうか」

「え、何それ知らない……」

いや知っているけれども。あれだよね、よく物語に出てくる吸血鬼がコウモリや人の血を吸つて手下みたいにするやつ。だけど何故突然……？

「文句なくこの世界で最強の吸血鬼の末裔である君の眷属になれば、死神や虚という枠を超えた存在になるための助けになれるんじやないかと思つてね」

「そんなのになりたいんですか……」

「私はね、天に立つべきなんだ」

なんか語り出したぞ……。真子さんの話ではもつと当たり障りない会話しかしない上辺だけの人だと思つてたんだけど。

「私は才能のある子供だった。当時から周りの大人など簡単に殺せるほどの力を持っていたんだ。この私以外に、誰が天に立つというのか」

「そ、そなんですね……？」

「わかってくれるか。やはり、私をわかってくれるのはただ一人君だけだと思つていたよ」

ごめんなさいわかりません適当に相槌打つてただけです！ そんな心の叫びは通じない。さてはこの人、表面だけ取り繕うのは得意つてだけのぼっちだな！ それなら僕が理解者になるのもわかるけど、それはそれで失礼な話だ。

「ああいや、この話はいいんだ。それより今は眷属の話をしようじやないか」

「だからわかんないですって……」

『血をギリギリまで吸つて自分の血を少し入れたらできるわよー』

「きよ、狂犬！ どこから声が……」

「そうなのか！　どういう仕組みで眷属にできるのか、実に興味深い。
吸血鬼の血を取り込むだけではいけないのだろうか」

めつちや強引だーー！　どんだけ吸血鬼の眷属とやらになりたい
んだよ……。知らないものに対する反応がお父さんとほとんど同じ
で怖い。でもその割には、突然謎空間に響き渡る狂犬の声には動じて
ないのが不思議だ。

『でも主人には絶対服従で主人より弱くなるから結構不便だと思
わ。主人になるほうも大変だろうから私も作つたことなかつたしね』
狂犬もそのまま続けるんだね……。

「ふむ……。では眷属になつても私の望みは叶わないのか。ならばこ
ちらが吸血鬼の血を摂取するというのはどうだろう」

「あ、それは多分何も起ららないと思います。怪我があつたら治りま
すけど」

「試したことがあるのかい？」

「昔少し……うーん、説明が難しいので割愛しますけど、普通の人人が血
を飲んでも凶暴化するとか力が強くなるとか聞かなかつたので」
「なるほど。まだ死神に使つたらどうなるかわからんなんだね。では
あとで試すとしよう」

「えっ」

試すつて自分で？　それとも他人で？　というか誰の血を使う想
定なんですか……？

「もちろん君の血だよ」

「ギヤー！　思考が読まれてるし僕の血が狙われてる！」

「はは、冗談さ」

「怖い、もう帰りたい……」

距離をとりながらめそめそしてる僕に気づいたかきづかないか（ど
うせ後者だと思うが）、その笑みは絶やさずにその目に捕獲者の光を
灯している。なんと器用な……。

そう思つていたら、急にその光を潜めて目を丸くした。

「おや」

「ひい、な、なんですか……」

「こんなところに扉なんてなかつたはずだが」

「へ？」

藍染さんの目線の先、僕のほぼ真後ろを見やると、たしかにさつきまでなかつたはずの扉があつた。よくわからないが、これで外に出られる……のか？

「そうだね。名残惜しいが、出るとしよう。外で何が起きているかきちんと把握しなければならない」

「また思考を……。まあ、そうですね。心配かけちゃつてるかも」

「また会おう、かぐちやん」

「それ定着させるんですね、そうちやん」

ふざけた台詞でわかれたはいいものの、同じドアから出るのだから同じ場所に出るのである。それってめちゃくちや気まずいなと思つたが、どうやら杞憂だつたらしい。仕組みはまったくわからないが、謎空間から出た先に藍染惣右介はいなかつたのだ。

扉は浦原商店の目の前に繋がつていた。

この不思議な出来事は、夢が現実かもわからないまま自分の胸にだけ残るだろう。それでも、何かが大きく変わるわけではない。これまで通りに僕にとつての普通の日常が続していくばかりだ。起きて、ご飯を食べて、学校に行く。たまに真子さんのところに遊びに行つたり、黒崎家にお邪魔したり。そんな日常が。

変わるとしたらただ一つ。藍染惣右介の話題が出るたびに、『その人は僕のことをかぐちやんって呼ぶんだよなあ』と思うようになるだけなのだ。

おまけ

「どうされたんです？ 藍染隊長」

「ああ、少し……面白い子と話す夢を見てね」

「珍しいなあ、藍染隊長が夢やなんて」

「私もそう思うよ。私にわからないことはまだまだあるのだと気付かされた」

「はあ……？ まあ楽しそうやからええですけど」